
勇者と奴隷の珍道中

神崎悠人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と奴隷の珍道中

【Nコード】

N3731Y

【作者名】

神崎悠人

【あらすじ】

「あゝやりすぎた」

グランロデオ王国。どこぞの異世界にある国の一つだったが、僅か一週間で崩壊してしまった。生き残ったのは地球から勇者として拉致された日本人の美倉唯と、呼び出した張本人である巫女のミクサ「エシユリー」。どうしたものかとミクサの首に巻かれている首輪の手綱を引き、唯は異世界を旅することになった。

「できれば言葉攻めも下さい」

「他所当たれ」

12月4日、『第一章 主従関係』完結予定、以降更新未定。

プロローグ

「あゝやりすぎた」

グランロデオ王国。何処にあるかは分からない異世界にある王国だが、そこに人々の姿は無い。転がっているのは人間や動物の死体の山だ。そんな死体の山を地球から来た美倉唯は、王国の中心に聳え立つグランロデオ城から見下ろしていた。

「た……たす………」

「やかましい」

ゲシ、と国王を蹴り飛ばして唯はバルコニーに背を向けた。城の中に入ると、赤い斑点やら眼球から出血している王族が見えた。生存者はほとんどおらず、先程彼が蹴り飛ばした国王も丁度今息を引き取った。死体に染まる玉座周辺にて生きているのはもう、目の前で座り込んでいる王宮仕えの巫女、ミクサ「エシユリー」だけである。「とりあえず今日からお前は俺の奴隷な。逆らったら蹴り殺す」

「はい、ご主人様。御褒美に鞭を下さい」

「鞭無いから却下」

性格が反転してMになっている元巫女現奴隷に唯は思わず身を引いてしまうが、身から出た錆と考え、流すことにした。

「さてこれからどうするかな」

とりあえず唯は玉座に腰掛け、足を組んで目を閉じた。

そもその始まりは、目的を果たしたことによる高揚感と、それに伴い生まれた油断からだった。完成品の納められた鞆を抱えて職場を後にしたのはいい。けれども気がつけば見知らぬ異世界に拉致され、目の前にいた巫女（当時はまだ清楚な感じがした）のミクサに、

「ようこそ勇者様。グランロデオ王国へ」

等と言われて混乱している内に玉座の間に拉致され、王様に勇者

の称号を無理矢理与えられた。そこまではいい。

けれども唯に待っていたのは、勇者とは名ばかりの奴隷の如き扱
いだった。重力負荷が違うために強化（正確にはこの世界の住人の
方が弱い）された肉体で魔物と戦い、魔力があるからと禁呪やら実
験中やらの魔法の実験体。拳句の果てにはその様子を見ていたミク
サですら、何かのスイッチが入ったのかSとなって言葉攻めや鞭打
ちを与えてくる始末。

そんな状況になってブチ切れない人間は居ない。けれども人数や
経験の差で逆らうこともできない。……彼以外の人間ならば。

そしてブチ切れた唯は鞆の中に入っていたものに手を出し、ばら
撒いたのが三日前。その結果は王国の崩壊に繋がり、唯と（偶々寝
ているのを見つけた）ミクサを除く全ての生命の灯を消し去るのに
至った。

そもそも相手が悪かったのだ。王国に居た人間は彼の何を何も
知らない。地球では残虐DSで周囲に恐れられていることも、細菌
研究の第一人者で勝手に映画に出てくるようなバイオテロクラスの
細菌兵器を趣味で製作する程の天才だということも知らずに呼び出
したのだ。

ワクチン（抗ウイルス薬）もあるにはあったが二人分しかなく、
自分と奴隷が欲しくて偶々近くで寝ていたミクサに注射したのでも
うない。作るうにも材料も道具もない。もしかしたら魔法とやらで
何人が助かるかも、とか考えていたのだがあまりにも墮落しすぎて
いたのか、対抗手段を講じる間もなくたばっていった。

そして生存者がゼロとなり、現状に至った。

「ご主人様、辛うじて息のあった女中が今死にました。もう私達以
外には生存者はいません」

「その口を閉じる。蹴り飛ばされたいか？」

「むしろタコ殴りにして下さい」

きらきらした目で被虐趣味に走った奴隷を無視して、唯は嘆息し

た。そもそも絶望を、生き地獄を味あわせるためにわざと生かしたというのに、当の本人はSからMに変貌してしまった。これでは生かした意味がなくなる。

「まあ、道案内はいるか」

勝手が分らない異世界では立場はどうあれ協力者が居ると居ないでは違う。それどころかこちらの自由になる奴隷を手に入れたのだ。それで十分だと思いたいが……。

「どうぞ」

「勝手に嵌めてろ」

「畏まりましたご主人様」

本人が乗り気ってどんな御都合主義だと頭が痛くなる。唯は勝手に傍にいたミクサが何時作ったのか自作の首輪をいそいそと嵌め、そこから垂れ下がっている手綱を差し出してきたことに思わず頭を抱え込んでしまった。

けれどもこれでは先へ進まない。

「なあ、俺を元いた世界に返すことは可能か？」

「無理です。そもそも未完成な魔法なので、片道しか考えていませんでした。申し訳ありません。どうか愚かな奴隷に罰をお与えください」

役立たずな奴隷である。まあ、今帰ったとしても退屈な日常の繰返しか。未だ二十代だが、セカンドライフと洒落込むのも悪くない選択かもしれない。そう考えた唯は手綱を受け取り、王宮の外へ出ることにした。

「これから旅に出るか。お前はせいぜい扱き使ってやるよ」

「できれば言葉攻めも下さい」

「他所当たれ」

選択を誤ったか、と若き細菌学者は幸先の不安さに肩を落としたのであった。

登場人物

美倉唯

職業 旅人（細菌学者↓拉致被害者↓勇者↓大量殺戮者と経て実質無職）

人種 黄色人種

性格 残虐ドS

装備 勇者の剣、短剣、医療用メス（×10）、各種医薬品、魔法のローブ

備考 某映画の新種ウイルスを趣味で製作してしまう程の天才

ミクサ「エシユリ」

職業 奴隷（元王宮仕えの巫女）

人種 白人（蒼銀色の髪と同色の瞳）

性格 覚醒ドM

装備 奴隷の首輪（自作）、巫女装束（日本のものと大差ない）、

巨大鉄扇（鋼鉄製のハリセン）

備考 当初は敬謙な巫女だったが、勇者の処遇を聞いてSに、崩壊する国を見てMに覚醒した

第01話

「それでご主人様。これからどちらへ？」

「とにかく人里だ。風上で一番近い国へ案内しろ」

「畏まりましたご主人様」

首輪をぶら下げたまま頭を下げてきたミクサを一瞥して、唯は風上の方へと歩き出した。

ばら撒いた細菌兵器は空気感染を引き起こす代物だから、風下に位置する他国にも影響が出ているかもしれない。幸か不幸か、この世界では風は一定の方角にしか吹かないため、風上ならば安全だろうと踏んでの判断だ。この世界が地球の様に球体の惑星ならば近い将来、ウィルスで全滅してしまう恐れもあるが、その時はその時だ。二人が道なりに歩いていると、ふと唯は隣のミクサが何処まで忠実なのかを知りたくなってしまった。

「命令だ。全裸に「はい！」……… ならなくていいから服を脱ぐな」
忠実すぎた。命令を言いきる前に服に手を伸ばすなんてどうかしている。そう思ったが、もしかして絶望を味あわせ過ぎたから頭のねじが飛んだのではと唯は気づいた。

「…… お前、ちょっと逆立ち「はい！」して、みる……」

間違いない。できもしない逆立ちに悪戦苦闘しているミクサを見下ろして、唯はそう結論付けた。ただ狂っているだけだ、この女。（そんな奴を奴隷にしようとは…… 俺も堕ちたな）

とりあえず尻を蹴飛ばしてやめさせると、唯は再び歩を進めた。ミクサも手綱を引かれながらも、その背中を追いかけてくる。狂ってDMになった女をどうにかするのは後回しにして、とにかく先を急ぐことにした。

途中、盗賊に襲われるだの、魔物に狙われるだのといった事態もなく、無事小さな町（住民が生きていた。これ重要）に着いた二人

はまず、質屋で宝石類（王宮からの強奪品）を幾つか売りさばいて資金にし、可もなく不可もなく普通の宿屋に部屋を取った。

「さて……」

一人部屋のベッドに腰掛けた唯は、鞆を開けると中身を改め出した。中から出てきたのは職場から勝手に持ち出したり王宮からくすねたりした医薬品の数々、研究中の薬剤の処方箋、某医者に憧れて持ち歩いているメス10本、護身用の短剣（地球にて購入。ステンレス製）である。他には腰に差した勇者の剣（王宮からの支給品。ただの鉄剣）とベルトに結び付けたポーチに入っている応急キット（地球製）の二つだ。後は先程取り出した宝石類と換金した金銭のみ。

「おい、お前の持ち物も「はい！」服は脱がんでいい!!」

鞘に納めたままの短剣を残念な頭に叩きつけた唯は、立ちあがってミクサの手荷物を奪い取ると、口を広げて床にばら撒いた。

下着を含む衣類はいい。武器らしき鉄扇（形は明らかにハリセン）も許容範囲内だ。小物類は自己責任でいいからどうでもよし。家族の肖像画なんぞには興味ない。けれどもこれだけは許せない。

「おい、奴隷」

「何ですかご主人様？」

起き上がったミクサに唯は、手に持っていた小瓶を突き出して問いかけた。

「……これは何だ？」

「媚薬です」

毒かと思った俺は思わず倒れそうになるが、辛うじて踏ん張った。

「何故こんなものがある？ 本当は毒じゃないのか？」

「違います。そもそもそれは私物です。普段から毒を持ち歩くような人間はいません」

「目の前にいるだろうが」

「申し訳ございません。どうか卑しい私めに罰を」

…… 本当に媚薬か、と唯は疑心暗鬼になっていた。そもそもこの

世界の薬品には明るくないため、もし違っていたらそれだけで大変なことになる。細菌や薬品に明るい故の慎重さが仇になっている唯であつた。

「何で媚薬なんぞを持ち歩いていやがる？」

「ご主人様との熱い夜には必需品です」

「……そうかい」

こいつ、もしかしくなくても恋仲の男はいないだろうと唯は考えた。大方、箆笥辺りの肥やしになっているから持ち出したんだろうが、男っ気がないから俺に走る等という馬鹿げた発想に……走りかねないな。元から狂ってるし。

「よし罰だ。この瓶全部飲んで始末しろ」

悪い子の皆は媚薬と出た時点で良からぬ妄想に走つたことだろう。けれどもこれは（性的な意味で）健全な小説なので、イヤんな展開は一切ないことを明記しておく。あの後二人がどうなったかという……。

「ごしゅ、じんさ、まあ」

「……耳栓が欲しい」

大量の媚薬を服用した為に興奮してもだえ苦しんでいる奴隷（拘束済み）と、ミクサを無視してベッドに転がっている唯という、何とも色気のない展開だった。そして夜は更けていく。

本日の調教

理不尽な命令2回（内1回は中断）

蹴り飛ばし1回

物品投擲1回（鞘入りの短剣）

拘束して朝まで放置（媚薬を多分に投与した上で）

第01話（後書き）

思いつきと息抜きに書いたものです。希望者が多ければ続きを書きます。二次創作小説のほうもよろしく御願います。では

第02話

「……ん」

差し込まれた陽に当たり、唯の意識は徐々に覚醒していく。地球の安アパートでも、王宮の牢獄染みた部屋でもない、宿屋の一室だと思いだすと身体をゆっくりと起こし……。

「おい……」

「おはようございます、ご主人様」

どうやって抜け出したのか、目の前には奴隷のミクサがベッドの上で正座していた。流石に媚薬の効果は薄れたらしく、昨夜のように身悶えしていないが。

「朝餉になさいますか？ 湯浴みになさいますか？ それともわた

——」

「ベッドから降りろ」

朝から不快なものを見た。奴隷を容赦なく蹴り飛ばした唯のテンションはベッドから転がり落ちたミクサのように下落していった。

「……さて」

宿屋の一階にある食堂で食事を終えると、部屋を出る前に唯は昨夜の続きに取り掛かった。持ち物の確認である。

昨夜はミクサの媚薬で一悶着あったため、着衣にまで気が回っていなかったのだ。旅に出る前に装備も含めて確認しておかなければならない。

現在、唯が身に纏っているのは地球に居た時から着ていた濃紺色のジーンズに厚手のカジュアルジャケット（黒）、インナーにこの世界で支給されたシャツだけである。他にも一応、王宮からかつぱらってきた魔法のローブがあるのだが、機能性とはかく装飾が派手なので下手に着込むと目立つ。

仕方がないのでローブは鞆に仕舞い、代わりに腰のベルトに短剣

の鞘を、ジャケットの懷にメスを数本身に着けた。後は名前だけの勇者の剣だが、ただの鉄剣だから売って別のものを購入することにした。こちらにも無駄に装飾過多なので、売れることは売れるだろう。勇者というネームバリューにも興味はないし。

「後は……」

そう呟いて唯は視線を部屋の隅で転がっているミクサ（先程再び蹴り飛ばした。また馬鹿をやりそうだったので）に向けた。彼女は地球の日本でも見るような巫女装束を身に着けており、長い髪先端だけを紐で縛っている。髪はともかく、装束そのものは魔法がかかっているらしく、多少の防御力が見込まれるらしいが、それだけというのも味気ない。

「前衛にも用にも使えそうにないな」

武器は昨日見た鉄扇ハリセンもじきを常備させておけばいいが、防具となると話が違ふ。今の服装も少しばかり目立つ代物だし、今後のことも考えて……。

「起きろ奴隷、出発前に買い出しに行くぞ」

「畏まりましたご主人様。それでどちらまで？」

呼びかけると同時に起き上がるとは、さては呼ばれるまで横になつて休んでやがったな。……いや待てよ。

「おい奴隷、お前魔法は何が使える？」

「ご主人様を呼び出した召喚魔法。回復、治癒魔法を一通り。後は簡単な強化魔法です」

「回復関連はどれくらいの怪我や病気の治療が可能だ？」

「病気は風邪等の治りを早める程度、怪我は自己治癒能力の促進が限界です。……ああ、後簡易的にですが体力回復の魔法も使えます」
成程と、唯は確信した。

「お前、俺に呼ばれるまで回復魔法を使っていただろ？」

「正確には治癒まほ——っ!？」

思わず口を閉じたミクサに、唯は嗜虐的な笑みを浮かべた。なんてことはない。この馬鹿は何度蹴られても自分で治療していたのだ。

どつりで壁や床にぶつけてできるはずの痣がなかったわけだ。おそらく媚薬に關しても使っていたに違いない。じゃなきゃ一瓶丸々の媚薬が一晩で効き目を無くすわけがない。

「成程成程、お前は主人である俺に“黙って”、“勝手に”、魔法をバンバン使っていたわけか」

「あ、ああ……」

流石のミクサも、状況を理解して思わず戦慄している。そりやそ
うだ、魔法を使えることを黙っていただけでなく、勝手に使っていたのだ。これでは自分は罰を受けてしまう。しかも、自分の望まないであろう罰を。

「ご、ご主人様、ど、どうかお慈悲を……せ、せめて一思いに殴りつけて下さい」

「安心しろ、今は殴ったりはしない。……ただ」

言葉を切ると唯は手を伸ばし、ミクサ自作の首輪に指を触れて呟いた。

「『Seal——封印』」

「あうっ!？」

身悶えするミクサから手を離し、唯は軽く手を振った。

「お前の魔力は封印した。以降は俺が許可しない限り魔法は使えない。……禁呪も役に立つもんだな」

「……あの、ご主人様？」

軽い。これでは罰にはならないとミクサは思ったが、同時にまだ終わっていないことに気づかされていた。

「さあてお望み通りに……殴りつけてやるよ、このゴミが!」

「できれば言葉攻めももっと苛烈に——アベシッ!？」

ミクサへの折檻は結局陽が高くなるまで続けられ、昼食も宿屋でとることになった二人であった。後折檻は暴力オンリーだから、悪い子は変な期待と妄想をしないようにね。

今朝の調教

蹴り飛ばし2回

魔力封印（以降は主人の許可なく魔法は使えません）

折檻（徹底的なフルボッコ）

第02話（後書き）

思ったよりネタが浮かんでしまう。卒業研究の勉強をしなければいけないのに……何故だ！？

第03話（前書き）

こつなりや やけくそだ！
勉強しつつ書いたらあゝ！！

第03話

「ハア、ハア……」

ぼこぼこに殴られ、意識が朦朧としているのか僅かに身じろぎするだけでピクリともしないミクサの腹に腰かけ、唯は今後の予定を修正していた。軽く息切れしているが、この程度ならば問題はない。「買い出し後に出立は……無理そうだな」

既に正午となり、陽は高く昇っている。急いで町を出たとしても、野宿の支度等を考えると大して距離は見込めない。仕方がないので買い出しを今日、じつくりと済ませて明日の夜明けに立とう。そう纏めると唯は立ち上がって、ミクサの腹に蹴りを入れて奴隷の覚醒を促した。

「起きろ奴隷」

「あ……は、い。かしこま、り。まし、た。ごしゅ、じん、さ、まあ」

ミクサの顔はもはや別人で通る程に腫れ上がっていた。元々が整った顔立ちをしていただけに、この変貌ぶりにはやりすぎた感が否めない唯である。……まあ、大量虐殺を行っても平然としている彼に、罪悪感が浮かぶなどということは有り得ないのだが。

「『Permission——許可』とつとと治せ。行くぞ」

「は、はい……『Healing——治癒』」

怪我の治療を済ませ、顔を元通りにしたミクサを従えて、唯は部屋を後にした。

移動中の描写を書いても退屈なので、目的地に着くまでの間、この小説を読んでいる悪い子にこの世界の魔法について説明しよう。この世界では誰もが魔法を使おうと思えば使えるんだ。けれども資質や才能等、個体差によって使える魔法が限られてくるんだ。しかも魔力容量、いわゆる魔法のエネルギーを蓄えられる量も人によっ

て違う上に、偶に魔力を持たない人間が居るから、外部にエネルギーを貯蔵できるタンクを外付けする必要があるんだ。所謂外付けHDDだね。それでも駄目な人間は、一般的な魔法どころか基礎中の基礎である『Light——光』という、明かりを生み出す魔法ですら習得するのに十年や二十年もかかるから、はつきり言って無駄な努力だよな。

後勇者として拉致された唯君は、落ちこぼれな連中と同格にするべきでないどころか、世界最高峰の素質を持っていると言っても差し支えないんだ。だから滅ぼした王国連中に禁呪だの実験中の魔法だの実験台にされたんだね。ご愁傷様」

「……何故か腹立たしく感じる」

「どうかなさいましたかごしゅ——げひっ!？」

武器屋の前に来た二人であつたが、突如苛立ち始めた唯は後ろに控えていたミクサを（八つ当たり気味に）後ろ蹴りで蹴り飛ばしてから店に入った。蹴り飛ばされたミクサも先に入った唯に続いて店の暖簾をくぐった。すぐさま立ち上がったところを見ると、大した怪我はしていないらしい。

「剣を売って別の武器が欲しい。これと同格以下の武器を見せてくれ」

「どれどれ……」

おそらく工房になっているであろう奥のスペースから恰幅のいい中年オヤジが出てきたので、唯は手に持った（自称）勇者の剣を差し出した。

「こいつは……ただの鉄剣だな。無駄に装飾の凝った」

「売れるか？」

「装飾だけならな。剣の方は役に立たないだろうが」

中年オヤジの言に従い、適当な棚に視線を巡らせて武器の物色を始めた唯。途中、嬉々として鞭を持ってきたミクサを蹴飛ばしたが、結局大したものは見つけれなかった。……近くの壁に飾られたそ

れを見るまでは。

「オヤジ、こいつは売り物か？」

「ん？……あんた、それを知ってるのか」

「故郷に似たようなのがあるからな」

とはいえ、現在では腰に差しているものは滅多にいないが。

壁に飾られていたのは一本の刀だった。黒い鞘に納められた、刀身が1メートルくらいの歴史を感じさせる代物である。

「この刀の茎を見てもいいか？」

「いいぜ。あんたは扱いを心得てそうだからな」

「知識だけさ。粗相しそうになつたら止めてくれ」

刀を壁から外して手に持つと、唯は適当な布を口に咥えて柄に触れた。多少手間取りはしたものの、無事柄を外すことに成功し、茎を晒すことができた。

「さて銘は……オヤジ、これを何処で手に入れた？」

「うちの爺さんが昔、変な格好をした男から買い取つたらしい。それ以外は知らんな」

「どうかなさいましたか、ご主人様」

ミクサの問いかけを無視して、いや耳に入らずに唯は黙って刀の柄を戻した。

茎には『永仁五年三月一日』と刻まれていた。昔刀について（興味本位で）調べていた時に知ったものと一致していた。刀の銘は蚩丸。太平洋戦争の折に行方不明になった国宝である。おそらく自分と同じ日本人が、何らかの手段でこの世界に来ていたのだ。その彼がどうなったかには興味はないが、こちらに來た手段には興味がある。

「これ以外の刀はあるか？」

「うちの工房で作ったものしかないぞ。作り方も買っていたからな」

「……ならいい」

こっちに永住することに決めたとはいえ、帰る手段があるなら知っておくにこしたことはない。そうすれば、地球の技術力も追加し

てこの世界を乗っ取ることも可能となってくる。また、逆に地球を牛耳ることも。

（世界征服に興味はないつもりだったが……可能なら面白そうだ）
「オヤジ、この刀をくれ」

こうして唯は刀『螢丸』を、ミクサはぼろぼろの鞭（殺傷性ゼロ、痛めつける以外の用途無し）をおまけで手に入れ、二人はホクホク顔で店を後にしたのであった。

今回の調教（以降『今回の調教』でタイトル固定）

蹴り飛ばし2回

魔法許可1回

鞭打ち（予定として追加）

第04話

さてさて現在彼らは防具屋へと向かっている真つ最中。その店は衣服屋も兼ねているから、装備関連の用事の残りは全部そこで片付くね。では移動中に恒例（予定）のこの世界の勉強講座だよ。

今日は魔法の使い方だよ。悪い子の皆、早くおいでー！

さて、皆はあの二人が魔法を使っているのを目の当たりにしたよね？

『Seal——封印』、『Permission——許可』、そして『Healing——治癒』の三つだよ。

頭でつかちで人に常識押し付けてくるような良い子達ならともかく、悪い子の皆はもう気づいたよね？ そう、詠唱自体はシンプルなんだ。まず英語、次に日本語と同じ意味の単語を並べて、その意味を魔法として使うんだ。でもただ唱えればいいってものじゃないよ。ちゃんと意味の通りになると強くイメージすることが大切なんだ。ある人も言っていたよね、『イメージするのは常に最強の自分』って。だから素質のある人はイメージが強固で、ない人は懦弱なんだ。イメージの差が資質の一つに関わってくるんだ。簡単だよ？ ではまた次回。次の勉強講座をお楽しみに♪

「……うゝむ」

「どうかなさいましたか、ご主人様」

「いや……」

防具屋に差し掛かる前、唯は何やら無性に苛立たしくなっていた。「何故移動する度に苛立たしくなるんだ……」

「どうぞ」

「アホ」

バシン！ と鞭を差し出してきたミクサの頭を強めに叩き付けると、唯は頭を振るって思考のリセットにかかった。鞭を落としてし

まい、慌てて拾おうとする奴隷を尻目に、唯はさつさと店に入ってしまった。

中は防具類よりも衣類の方が多く、後者がメインだとアピールしていた。けれども奥の方に並べられた防具類も革製でありながら遊びはなく、立派に盾や鎧の役割を果たしそうであった（革製だが）。「いらつしやい、なんにする？」

「まずは服がみたい。旅装関係はその棚か？」

首肯する店主（中年女性。見た目的には大らか）に一礼し、唯は追いついてきたミクサを連れて旅装関係の棚を物色し始めた。生地は荒いが（この世界に加工技術を求める方がどうかしている）しっかりした作りの服を上下3着ずつ選ぶと、今度は女性向けのエリアに目を向けた唯。

「巫女服は目立つから、地味な服を選んで来い」

ミクサにそう命じると、返事を聞く前に店主に選んだ服を押し付け、唯は革製の防具類を物色し始めた。作りは革製でも、作り手の腕がいいのか質のいい商品が棚の上に並んである。中には薄い鉄板を仕込んであるものもあり、下手な金属鎧よりも信頼できそうである。

「ご主人様。こちらはどうでしょうか？」

「もうえら——馬鹿かお前は——」

唯の踵落としがミクサの頭を打ち付けた。しかし思わず踵落としを決めた彼に非はほとんどないだろう。何故なら彼女が選んできたのは踊り子の服。上半身は際どい胸当てのみで下半身は腰に巻きつけてあるハーフマントと前掛けのみといった、ものすごく目立つ代物だったからだ。しかも何を勘違いしたのか、彼女はそれらを選ぶだけでなく、実際に身に着けているのだ。

例え試着OKでも、これは頂けないね。

「俺の命令聞いてたか、おいこら」

「き、聞いていました……」

頭を踏みつけられ、床の上で伸びているミクサの手が伸び、指さ

したのは女性用の旅装が何着か、棚から避けられてある。仕立ては若干古びてはいるが、未だに現役として通用する品々だった。おそらく中古品だろう。

「じゃあその服は何だ？」

「ご主人様との熱い夜に——」

「二度ネタ禁止——！」

もう一度顔を床に叩き付けてから、唯は足をどけて店主へと近寄っていった。

「というわけであの服も買う。この馬鹿が着ている服は返すからな」
「毎度あり……彼女はいいのかい？」

そう言つてミクサを指差してくる店主に唯は力強く頷いた。

「あいつは俺の奴隷な上に被虐趣味です」

「……相性抜群みたいだね」

呆れと何かよく分からない感情を混ぜた笑みを浮かべて、店主は衣類の入った包みを唯に差し出してきた。唯もそれを受け取ると、ミクサの傍に戻つて彼女の腹を蹴飛ばした。

「『Permission——許可』さつさと治してその服脱いで来い」

「『Healing——治癒』畏まりました、ご主人様」

なんだかんだ言いつつも素質があるのか、素早く怪我を治すとミクサは服を返すために脱ぎ始め——

「向こうで脱げっ!？」

唯に蹴り飛ばされたのであった。

今回の調教

はたく1回（頭を強めに）

踵落とし1回

踏みつける1回

叩き付ける1回（顔を地面に）

魔法許可1回

蹴り飛ばす2回

第05話

さて買い出しを終えた唯は、購入した衣類（2人分×3着）をミクサに持たせて雑貨屋へと向かっていた。ちなみに防具に関しては結局選ばなかった。店主曰く旅装に簡単な魔法をかけているから、大抵の攻撃は防げるらしい。後は周辺の地図と非常食、水を入れる水筒で当面必要な物がそろうことになる。

「あのお、ご主人様」

「なんだ？」

道中、荷物を抱えたミクサは唯に声をかけた。

「強化の魔法を使う許可を下さい。これだと荷物の重さでご主人様についていけません」

「強化？」

そういえば強化の魔法が使えると言っていたな、と唯は今朝の騒動を脇に寄せて魔法関連の記憶を手繰り寄せた。

「強化って、どれくらいのものが使えるんだ？」

「簡単にですが、肉体を多少動きやすくすることができます。後は効率が悪いですが、一時的に武器による攻撃を強化することもできます」

「ふ〜ん」

まあ、その程度ならいざ逆らってきても問題はないか、と唯は特に悩むこともなく許可を出した。

「『Permission——許可』」

「——フフフ……」

突如含み笑いを始めたミクサを訝しんで振り向くと、突如視界が覆われた。

「なっ！？」

一瞬硬直するも、勇者としていびられていた時の経験（意外と使える）が役に立って咄嗟に手が動いた。受け止めたのは先程ミクサ

に押し付けた衣類の入った袋。

「おい、これはどういう——」

「『Reinforcement——強化』ハアア……!!」

姿形は変わらない。けれどもミクサの周囲に纏っていた雰囲気徐徐に重苦しく感じてきた。おそらく肉体を強化した影響で纏っている空気も重く感じてしまうからだろう。

「……これでもう、奴隷扱いはできないわよね。可愛いそうな唯君？」

「おい、まさか……」

一時期、ミクサから『唯君』と呼ばれていたことはあったが、当時は彼女が周りに感化されてSだった時だけだ。けれども、例えばMだったとしても、以前のSだった彼女もまた、ミクサ「エシユリ」であることに変わりはない。

まさか油断したところを歯牙にかけるつもりだったとは、と唯は腰に差した刀の柄に手を伸ばし、

「さあ……今すぐ引き返して踊り子の服を購入してきなさい！」

「んなしょうもない理由で反逆してんじゃねえ!!」

腰から鞘ごと引き抜いてミクサを頭から一刀両断するかの如く叩き付けた。

余談だが例え彼女が自らの肉体を強化しても、現在の彼の身体能力には遠く及びもしないだろう。幼稚園児から小学生に強化されても成人男性に適うわけではないのだ。

そして唯は刀を腰に戻すと、巫女装束が捲れ上がるのも厭わずに気絶したミクサの足を持って引き摺っていった。

さあ悪い子の皆、彼らの移動中恒例の楽しい勉強の時間だよ。良い子の世間的評判を下げてないで早くおいで。

さて今日は禁呪として使われている『Seal——封印』について説明するよ。

封印は用途は様々だけど、一貫しての効力は『何かを封じる』こ

となんだ。封じる対象はそれこそ何でもいいんだ。だからこそ禁呪として扱われていたんだね。けれどもこの魔法は『何かを封じる』分、封じる対象が曖昧なんだ。だからイメージしづらくて精々『鍵をかける』位にしか使われていない筈だったんだよ。でも王宮の誰かが他のものも封じられると思いつき、どこまで封じることができるのかを唯君で試したんだ。そして魔法やら身体能力やらを封印して自在に操ろうとしたんだけど、この魔法、結構使い勝手も悪いんだ。

だって封印を解く条件が『術者の許可』だけじゃなく、『術者の死亡』、『イメージの崩壊』、『魔力枯渇』と結構ハードな魔法なんだよね。その難易度から、封印の魔法は禁呪扱いを受けることになったんだ。でも唯君は『世界最高峰の素質』、『素質に伴う魔力容量』、『強固なイメージ』と解除条件にあまり当てはまらないから、ミクサちゃんに簡単に封印魔法をかけられたんだね。まあ、例え禁呪がなくても、本気になった唯君にミクサちゃんが勝てるわけがないんだけどね。」

「……んん」

ミクサが目を覚まして真っ先に映ったのは主人である唯の足元だった。叩き付けられた頭を擦りつつ立ち上がると、丁度いい物を終えた唯が荷物を持って振り返ってきた。

「起きたか、奴隷」

「えつと、ご主人様……」

ミクサは先程の騒動が原因で目を合わせられない。個人的には媚薬同様、必要だと感じて購入を迫ったのだが、すげなく断られてしまったのだ。個人的には純粋な暴力も好きだが、性的な暴力（絶対に阻止するから安心してね）も受けたいのだ。けれども媚薬は強制処分、際どい服装も却下されたのだ。例え奴隷に身をやつしても、娯楽を欲しがるのは人間の性だ。だから逆らっても手に入れようと、DSモードに返り咲いたのだ。

けれども敵に回したのが自分の主人、

「後でたっぷりお仕置きしてやるからな。覚悟しておけ」

「は、はい……」

グランロデオ王国を単身で滅ぼした悪逆非道な元勇者、美倉唯であつたことが彼女の敗因であつた。はてさて彼女の運命やいかに！

今回の調教

鞘叩き1回（脳天にすごい勢いで）

引き回しの刑（気絶状態のため、罰になっていない）

第06話

彼女は怯えていた。そう、前回ドSモードに返り咲いて意中の品（踊り子の服）を手に入れようとした奴隷のミクサである。彼女は震えた身体に鞭打ち、肉体労働に勤しんでいた。

ちよつと魔が差したただけなのに、それでもえげつない報復が待っていると思わせる足取りでミクサの前方を歩くのは彼女のご主人様、美倉唯である。彼は小さな包みを持っているだけだが、その中身がミクサにとっては恐怖の対象なのだ。

（あの中身は……何？）

旅のために購入した携帯用の医薬品ならまだいい。けれどもあれが毒とかならば、いや話を聞く限りでは薬品関係に精通している彼のことだ。新しい薬を調合し、罰と称して実験台にするかもしれない。あまりの恐ろしさに足取りも重くなるミクサだが、それでも足を動かさなければならぬ。少しでも罰を重くしないようにしなければ、明日の夜明けすら見れなくなるのかもしれないのだから。

宿屋につき、明朝出立する準備を整えた二人は、前後に並んで一階へと降りていった。食堂につくと、首輪につられて集まってくる視線を無視して、奥の席へと腰かける。ただしミクサは奴隷らしく、床の上に腰かけたのだが。

「あ、ご主人様。お食事を——」

「命令だ。そこでじつとしている」

そう言い残して、唯は食事を取りに行った。昼食まではミクサに取りに行かせていたのに、夕食だけは違うことに、ミクサは絶望した。

（もしかしたら、最後の食事もかもしれない）

殺す前に優しくされたのかと感じたミクサは、唯が戻ってくるまで心中で泣いていた。食事中も一切顔を上げることもなかった彼女の食事は、いつもよりしょっぱかったらしい。

今日は食事中にお勉強タイムだ。悪い子の皆は食事しながら聞いてね。

さてこの世界の食事だけど、実際は地球のものと大して変わらな
いんだ。けれども内容は、中世ヨーロッパのものに近く、洋食がメ
インなんだ。でもでもお米とかを食べる風習もあるから、一概に洋
食とは言えないんだ。例えるならば和洋中ごちゃ混ぜな現代日本の
食卓かな。結構何でもあるから、唯君もこの世界でセカンドライフ
を送ろうとしたんだね。皆の好きな食べ物はこの世界にあるかな？
それじゃあ今日はこの辺で。はい、御馳走様でした。

(まずい、まずいまずい……………)

ミクサの残りの命は、既に秒読みに入っていた。

このまま部屋に戻れば、どのような仕打ちを受けても自分は甘ん
じて受けなければならない。否、魔力を封印され、武器もない、力
もない自分にできることなど、たかが知れている。どうすればいい、
どうすれば生き残れる？ 例え奴隷でも、今が至福の自分にとって
死の恐怖は決して受け入れられない代物なのだ。

「…………さて、奴隷」

「はい。何でしょうか、ご主人様」

分かっている、ここで死ぬのだ。けれどもこのまま罰を享受する
位ならば、と服に手をかけたミクサ。元々身体を許すつもりだった
のだ。だったら色仕掛けでも何でもして奴隷として生き残る（性奴
隷も可）！！

「そろそろ腹の調子が悪いんじゃないのか？」

「はい？」

強く決意したミクサの手が思わず止まってしまった。

変なことを聞かれて思わずポカンとしているミクサを眺めている
唯の顔はえらく嗜虐的に歪んでいる。けれども腹の調子を聞かれた
と、いうことは…………。

「はうつ！？」

答えは下剤だった。

「ご、ご主人様……！！」

「それだよそれ。その顔が見たかったんだよね」

現在ミクサは厠に行かされることなく（当然のことながら）、身体を縛り付けられて部屋窓から吊るされていた。腹部からくる荒波とぶら下がっていることで起きる引力、宿屋の裏手とはいえ人通りのある場所での羞恥と三重苦に苦しむミクサの表情は、この世の絶望を味わい尽くしたかのように暗く刻まれていた。

「ま、魔法を使わせて——」

「そうしたら反逆されたしなあ」

現在、唯の顔はとても生き生きとしている。反逆を未然に阻止して、奴隷を引きずって雑貨屋に入った時に見つけた品でピンと来たのが夕食前。ミクサの分の食事にこっそり下剤を混ぜて食べさせたのだ。どれくらい効くのかと説明書の適量通り（補足：この国の言語は魔法で翻訳できる）混ぜたのだが、かなりの効き目らしい。最初は味の変化で気付くかとも思ったが、何を考えていたのかぼーっとしていたので気づくことなく部屋へと戻り、今に至るというわけだ。

「せ、せめて厠に……うつ」

「明日起きたら降ろしてやる。んじゃお休み」

ご主人様……！！ という奴隷の叫びがこだましたが、唯は構うことなくベッドに潜って眠りについた。奴隷を引き連れる本来の目的を果たし、その顔はひどくご満悦といったかんじである。

今日の調教

下剤（適量）

野ざらし（縛り付けて部屋から、朝まで）

第07話

——ぎい……

「ちつ、間に合いやがったか」

「いえ、結構ギリギリでした……」

明朝。やつれた顔をして部屋に戻ってきたミクサは、体力が尽きたらしくそのまま床に倒れ込んだ。その様子を唯はベッドに足を組んで腰掛けた姿勢のまま、静かに見下ろしている。

「というかよく間に合ったな。こっそり魔法で便意を誤魔化したか？」

「例え使えても、そんな魔法に頼ったら私の矜持が——」

「奴隷に人権は無いぞ？」

ますます床に突っ伏してしまふ奴隷に、唯は近くに置いておいた鞭を手にとると軽く振ってミクサを叩いた。

「あうっ！……もつと下さい」

「気力があるのやらないのやら……んで、どうやって間に合わせた？」

「答えますからもつと鞭を……」

答えたらな、と唯は軽く呟いた筈なのに、ミクサはすぐさま起き上がってベッドの近くに正座しだした。そして滔々と語り始める奴隷に主人は呆れたとか何とか。

「エシユリー家には108つの秘儀があり、その内の一つを使いました」

「色々聞いてみたい気もするが……一体どんなものだ？」

「肛門括約筋の操作です」

……こいつもう女であること忘れてね？

堂々と際どいことを答えるミクサに唯がそう思っても仕方がないのかもしれない。呆れた唯はとりあえず鞭をやるかと数度手首を振るった。適当な鞭でも、向こうにとっては至福らしくその顔は途轍

もなく緩んでいたとここで追記しておこう。

さてさて悪い子の皆は疑問に思ったことだろう。何故ミクサちゃん
は唯君からの仕打ちに喜んだり嫌がったりしたのだろうか。実は
決定的な理由があるんだ。

きっかけや理由は伏せておくけれど、実はミクサちゃんが大好き
なのは（性的含む）肉体的暴行を受けることなんだ。むしろそれを
目当てとしている節もあるね。だから精神的苦痛、放置や無視とか
はちよつと駄目なんだ。つまり彼女は常に構って欲しい、構ってち
ゃんなんだね。しかもなまじプライドや欲求があるから、それらを
蔑ろにされると興奮できなくなるんだ。ホントミクサちゃんは困っ
た娘だよね。

「……さて、そろそろ行くか」

「う、ご主人様。もつと下さい！」

「いいから支度しろ馬鹿」

鞭を束ねて顔面に叩きつけてから、唯は昨日のうちに纏めておい
た荷物を手にとってベッドから立ち上がった。服装は昨日購入した
旅装一式で腰に刀と短剣を差してある。服は長袖のズボンにポロシ
ヤツのようないでたちのインナー、その上に厚手の上着を着込んで
前で閉じている。足元も地球からずっと履いていた皮靴から皮ブー
ツに変えてある。色は目立たないように茶色系統で統一してあった。
「ま、こんなもんか」

昨日まで着ていた物は全て鞆の中に仕舞ってある。流石にスペー
スがないと思っていたが、魔法での拡張に成功した。鞆には今、大
きさによつては畳二畳分の荷物が入るといっても過言ではなかった。

「お前もとつと着替えろ」

「ご主人様、巫女服も持参したいのですが……」

「それは自己責任でどうにかしろ」

それだけ聞ければ十分なのか、ミクサは立ち上がるとあっさり巫

女服を脱ぎ捨てて下着姿になり、唯と同じように旅装を身につけ出した。

ミクサの服装は唯と同じ茶系統の色合いだが、下は丈の長いスカート、上はＴシャツに厚手のカーディガンを羽織っている。昨日も見たとおり少し古びてはいたが、着ている分には不備はなさそうだった。そして背中には細長い袋をぶら下げ、中に入れられた鉄扇ハリセンの柄が肩越しにのぞいている。

「それじゃあ行くか」

「ところでご主人様。私の身体はどうで——あぎやつ!？」

「行くと言っただろうが。早く荷物纏めやがれ」

例え目の前で着替え出しても、一切揺るがない唯君でした。世間ではこれをヘタレと呼ぶかもしれないが、彼の場合は根本的に興奮していません。ちなみにミクサの身体つきはグラマラスという程ではありませんが、出るところは出て引っ込んでるところは引っ込んでます。かしこ。

「よし、纏めたな。飯食ったら町を出るぞ」

「畏まりましたご主人様」

蹴飛ばされてもめげないミクサであった。

今回の調教

鞭打ち数回

蹴り飛ばし1回

第07話（後書き）

今回ちょっと短めなので追加です。悪い子から質問があったら本文中でお答えします。良かったら感想板なりで質問を投稿してみてください。あ、ちなみに良い子からの質問には唾を吐きかけますのであしからず。

作者「お前誰!？」

第08話

「おい、聞いたか？」

「ああ、確認を取りに向かった連中も戻ってきていないらしいし、信憑性が高いな」

朝の食堂は今、一つの話で盛り上がっていた。話題となっているのは新聞（木板だが普通に売られている。日刊）の見出しだった。
『グランロデオ王国崩壊！？』

さて、悪い子の皆の為に新聞を読んであげよう。何々」

『先日よりグランロデオ王国民に奇病が発症した。その魔の手は王宮にも伸び、王族・奉公人を問わずに貪り尽くした。原因は不明で、宮仕えの魔法医師達にも正体を探ることはできず、そのまま死亡に繋がった。この国は一月前、召喚魔法についての調査を行っていたことが当局の調べにより分かり、近隣諸国もその召喚魔法にて未知の病原菌を召喚したのではないかと強く見ている。また、病原菌は未だにグランロデオ王国を蹂躪しているらしく、入国者の発症が後を絶たない』

うわぁ恐いね。特に『未知の病原菌を召喚した』って記述なんて当たらずも遠からずだからすごいよね。人間って。……え、怖いと思う点が違う、って？ うーん、どうでもいいんじゃないかなあ。皆も、自分から死地に突っ込んでいく良い子達はともかく、悪い子の皆は絶対に王国に近づいちゃ駄目だよ。約束」

「ちよいと、その人」

「うん？」

カウンターで朝食にありついていた男は、後ろからの呼び掛けに応えて振りかえった。そこにいたのは、テーブルに腰掛けた旅人らしき男。だがただの旅人とも思えない。何故なら――

「その新聞読み終わったなら売ってくれないか？ できれば買った時の半値で」

「これか？ だったらタダでやるから質問に答えてくれ」

「答えられる内容なら」

男は静かに旅人らしき男、唯に新聞を投げ渡し、投げた手をそのまま質問の対象に向けて言った。

「何でこの嬢ちゃん地べたで犬食いしてんだ！？」

「あん……ああ、こいつか」

唯の足元ではミクサが床に置いた皿に口をつけて咀嚼していた。しかもただがつくこともなく、舐めるようにして食事している為に服に汚れらしい汚れが付いていなかった。

「いや、今朝『奴隷に人権なんてない』って言ったら急に犬食いしだしたんだよ。昨日までは普通に床から皿を取って食ってたんだがな」

「この嬢ちゃんが奴隷って……グランロデオといい、世の中悪い方向に進んでいるな」

「そんなもんさ、世の中なんて」

背中を向けた男にそう言い残して、唯は受け取った新聞に目を走らせた。内容は奇病による国の崩壊と近隣諸国の今後の方針について語られていたが、解決の目処は立っていないらしい。

（——は、いいんだが……妙だな？）

唯の頭に一つの疑問が浮かんでいた。今後の方針を検討している国の中に、グランロデオの風下に位置する国の名前もあった。だがグランロデオ王国と風下に位置するキャンベル自治区は大して離れていたわけではない。つまり感染が広がっていてもおかしくない国なのだ。

（偶然か、それとも……）

可能性は幾つもあるが、情報が少ない現状では推測の域を出ない。これ以上は考えるだけ無駄かと思いを中断すると、鞆から地図を取り出してテーブルの上に広げた。

「ここから近いのはキール連邦とダルメシアン公国か……おい、奴隷」

「はいご主人様。どうかありませんか？」

食事を終えて床に座り込んでいたミクサは唯の呼び掛けに応え、素早く立ち上がると傍によって手を後ろに組んだ。

「この二つの国のうち、人間の出入りが活発なのはどっちだ？」

「ダルメシアン公国ですが……あまりお勧めしません」

「何故だ？」

ミクサは組んでいた手を解き、右手を地図の上に伸ばして説明を始めた。

「今、この国の情勢は安定していません。何処で知ったのか、グラノロデオと同じように勇者を召喚したらしく、国民を含めててんてこ舞いらしいのです」

「……勇者？」

自分以外の勇者の存在を聞いて、唯はしばし黙考したが、一つ気になることがあったのでミクサの方を向いて問いかけた。

「その勇者は国に協力的だったか？」

「聞いた限りでは、むしろ積極的だったと」

「そうか……」

となると方針は決まった。

唯は立ち上がると、地図を鞆に戻してから持ち手を掴んだ。

「まずはキール連邦に行くぞ。そこから先は着いてから考える」

「ご主人様の意のままに」

荷物を抱えたミクサを従え、唯は宿の食堂を後にした。

今回の調教

犬食い（自主的行動の為、以降はカウントせず）

第09話

町を出て道なりに歩いて行くこと早数刻。もうすぐ正午に差しかかるうという時に、彼らは現れた。

「まあ、これが普通だわな」

「何を訳の分らないことをほざいてやる？」

唯達の前に突如現れたのは筋骨隆々な方々。彼らは徒党を組んで通りがかった者にちよっかいをかけては金品や女子供を誘拐していく、所謂盗賊のお歴々である。さあ、唯とミクサの運命や如何に……って分かりきってるよね？

「さあ、金目の物を置いて行け！」

「後その女もだ。お前の分もせいぜい可愛がつてやるぜ！」

ヒツヒツヒと笑い出す三下共に、唯は一步前に出て言い放った。

「とりあえず諸々は後回しにして聞きたいことがある」

「何だ、冥土の土産に言ってみろ」

よせばいいのに盗賊達はもう勝った気にいるのか、余裕綽々に唯を促した。彼らの過ちはここから始まる。

「よくこういう状況で女子供を誘拐していくが、男の子の使い道って何だ？」

「……は？」

そこからはもう唯の独壇場である。

「男を誘拐しないのは従順でないことから分かる。だが男の子を誘拐しても女の子よりも市場価値は薄い。ならば肉体労働用の奴隷か？ それならば大人の方が反抗的でも即戦力が見込めるから意味がない。例え性奴隷にしても求められるのは一部の顧客のみだから前述の通り価値は薄い。国に兵力として売るのもありだが、それでも買い取ってくれるのは長期利益を図る大国家のみ。国の成長に必要な短期利益を望む中小国家ではまず売れない。ならば仲間にするのか？ けれどもその日暮らしの盗賊稼業ではまともに育てられる環

境ではないので論外だ。相手が王族、もしくはやんごとない身分の御子息ならば成功確率はともかく、身代金という旨みがあるが遭遇するのは極稀！では何故誘拐対象に男の子が入っているのか！？それを答えて欲しい！！」

「ええと……」

突然の質問に狼狽する盗賊達だが、答える者は一人も居ない。それはそうだろう、答えられる程頭がいいなら、こんなところで盗賊なんてやってないだろうし。

「あの、差し出がましいようですがご主人様」
「何だ？」

答えられないと知るや、もう用なしとばかりに目を盗賊達から逸らした唯に、ミクサは見上げた形で答えた。そういえば20cm位身長差があつたこの二人。

「一応人体実験という用途がありますよ？ 特殊なものでない限り実験対象は子供の方が望ましいですし、いちいち性別を選ぶ必要はありませんから」

「……ああ、それがあつたな」

『いやおかしいだろお前！？』

ポンと手を打つ唯に、盗賊達は声を揃えて突っ込んだ。何しろこの二人、恐がるどころか訳の分からない理屈（盗賊にはそう聞こえた）をいきなり展開してきたのだ。特に男の方はもう興味を失くしたのか、半ば適当にその場から去ろうとしている。

「……って、ちよつと待った！ 何処行こうとしているんだよ！？」

盗賊の一人が無防備に唯達の前に飛び出してきた。

「そうですよご主人様、答えた御褒美に鞭を下さい！」

「いやそれどころじゃないよね今！？ てか鞭！？」

思わずミクサにツツコミを入れてしまう盗賊A。唯はもうどうでもよさげに口を開いて命令を下す。

「『Permission——許可』……こいつら全員しばき倒したら考えて「終わりました！」早っ！？」

唯が驚くのも無理はないだろう。『許可』^{ハリセンもどき}が出ると同時に素早く強化し、命令を言い終わる前にミクサは背中の鉄扇を抜き放ち、盗賊の頭全てに（軽く十人位は居た）強打撃を与えたのだから。いやあ、ミクサちゃんも欲望に忠実とはいえ容赦がないねえ♪

「……まあ、いいか」

「ではご主人様、早速——」

「後でな」

鉄扇を持って目を輝かせているミクサを軽く小突いて、唯は歩を進め——

「……ま、まで」

ようとして断念し、声のした方を向いた。そこには盗賊の中で一際ガタイのいい男がカッタラスを二本、左右の手に一本ずつ握っておぼつかない足取りながらも立ちあがっていた。

「申し訳ございませんご主人様。罰は後ほど受けますので少々お待ちを——」

「いや、いい。じっとしている」

再び鉄扇を構えるミクサを脇に除け、唯は盗賊の前に立ち塞がった。

「お前が頭か？」

「そつだ。お前だけでも——っ!？」

頭が勢いをつけて両手のカッタラスを振り降ろすよりも先に、唯の斬撃が相手の攻撃を狩り取った。

「あ、ああ、あああ………っ!？」

頭の両手は手首から先が切り離され、切断面から次々と血が飛び出してきた。唯は倒れゆく盗賊に目もくれずに、抜き放った蜚丸の刀身を軽く振った。刃に着いた血が飛び散り、地面を赤く染めていく。

「流石国宝、凄いい切れ味だな。……紙」

「どうぞ」

「髪じゃねえよ馬鹿!」

自分の髪の毛を突き出すという、どうでもいいボケを繰り返す奴隷を蹴り飛ばし、唯は適当な布を盗賊の衣類から剥ぎ取り刀身を拭いた。

今回の調教

小突く1回（軽く）

蹴り飛ばす1回

鞭打ち（予定）

第10話

「……さて」

刀を鞘に戻してから、唯は適当な盗賊の男（……よく見たら盗賊Aだった）を選んで蹴り起こすと、ミクサに鉄扇ハリセンもどきを首筋に当てるよう命じた。

「お前達の宝を貰おうか？」

「ご主人様に逆らったら……分かってるわよね」

「あんたら悪魔か！？」

その言葉に二人は一瞬見合わせるも、再び視線を戻して言い放った。

『悪魔如きと同列視されても……』

「本気で困った顔してんじやねえ畜生ッ！？」

この男、結構神経が図太い。普通、こんなツツコミを入れたら即殺される筈なのに言い切るとは……恐ろしい子！？

「ま、それはともかく早いとこ吐け。他にも居るから別にお前でなくとも問題ないしな」

「……分かったよ」

諦めたのか何か思惑があるのか、盗賊Aは立ちあがって唯達を案内した。自分達のアジトへ。

さあ悪い子の皆、移動中恒例のお勉強の時間だよ」

今日は唯君の持っている武器、蛍丸について説明するよ。

蛍丸は鎌倉時代末期の刀工、来国俊によって生み出された約1mの刀身を持つ大太刀なんだ。1931年に国宝に指定されたけど、後の太平洋戦争終戦時の混乱で行方不明になってしまい、今は唯君が持っているんだよ。ちなみにこの刀には一つの伝説があつてある武将が実戦で使用した際に刃こぼれしたんだけど、蛍が群がって刀を直した夢を武将が見て、実際に目を覚ますと本当に直っていた

らしいよ。本当かどうかは分からないけど凄いな〜
じゃ、また次回。

「……分かってたよ。分かってたさ！　こうなること位は！！」

「いいから黙れ。ご主人様の耳に障る」

ここまで案内させた盗賊Aを叩きのめし、ミクサは悠々と刀と刀身を拭っている唯に近寄って行った。

「お疲れ様です。ご主人様」

「……ああ」

刀を鞘に戻し、唯はミクサの方を振り向く。その後ろでは死屍累々と盗賊共の死体や虫の息の容態があちこちに転がっており、もはや盗賊の中で立ち上げられる者は存在していなかった。

しかし、幾ら二人がぶつ飛んできると言っても、さっきの6倍近くいた盗賊達を殲滅するなんて……説明を短めにして戦いの様子を見物すれば良かったな。

「で、宝は何処にあるって言ってた？」

「この洞窟の奥らしいです。そこに売り物を纏めたとか」

盗賊共のアジトは自然の洞窟を拡張させた代物で、分かれ道も何もないものだった。だから人一人が通れるくらいの通路に陣取れば、後はやってくる盗賊一人一人を相手取るだけであっさり全滅に追いこんだのだ。しかもなまじう暗い為に飛び道具も使えないし、盗賊達にとっては踏んだり蹴ったりな惨状である。

「……まあ、売り物だな」

「売り物ですね」

二人の目の前には二つの檻があった。片方には強奪した宝石や金銭類が詰め込まれ、もう片方にはどこから捕らえてきた女子供――奴隷が二、三十人、放りこまれていた。

「どうしますご主人様。差し出がましいようですが、隣の宝石類だけでも十分な成果だと思うのですが」

「そうだなあ……」

唯は視線を奴隷達が居る檻に向けた。服は皆ボロボロで髪も乱れている。だが何人かの目が――

「……よし、解放するだけして後は放置。ちよつと檻壊せ」

「畏まりましたご主人様」

そう命じられたミクサは命令通りに檻を鉄扇で壊し（強化済み）、扉をこじ開けた。

「というわけでお前ら、後は好きにしな。どう生きようと自由だが一つだけ――」

檻から次々と奴隷達が出てきた。子供達はともかく、数名の女性
が盗賊の死体から武器を奪い取ると、唯へと押し迫って来た！

「――俺に敵対するのだけはやめておけ。命の無駄だ」

そう唯が言い終わる頃には既に、ミクサの鉄扇で首を引きちぎられた彼女達の死体が地面に転がった。

「……ご主人様。彼女達が襲い掛かってくるのを知ってて解放の命を出したのですか？」

「大方、こいつらも盗人の類だったんだろうな。……まあ、その辺の雑魚ならどうでもいいさ」

「人が悪いね。……檻を開ける前に警告してやれば良かっただろうに」

そう言われ、ミクサは思わず身構えたが、唯は我関せずと自然体で檻の奥に声をかけた。

「……で、お前何者だ？　ここにいた盗賊連中よりもできるようだが」

檻から出て、唯達の前に現われたのは一人の女だった。黒髪をたなびかせてボールと表現してもいい胸をぶら下げている。地球のチヤイナドレスに近い赤い服を身に纏っているが、伸びている手足の筋肉はそこらの人間よりも引きしまっていた。もし戦いなれている人間が見たら迷わず彼女をこう推測して口にするだろう。

——拳法家、と

今回の調教

都合によりなし

第11話

「まずは礼を言っておくべきかな。助けてくれたことに対して」

「成り行きだから別にいい」

唯はミクサの後ろから一步も動かなかった、否動けなかった。相手はおそらく強者、今の唯達だとともにやり合えばおそらくは…

…。

「まあ、そう警戒するな。こちらは敵対する理由がないんだからさ」

「……なら、いいがな」

そう呟いて唯は警戒を解き、ミクサにも武器を下ろすように告げた。

「で、お前が捕まっていた理由は何だったんだ？」

「酔っているところを連れてこられたのさ。昨夜」

女は気楽に答えてから隣の檻に立ち寄り、素手で扉をこじ開けた。「本当はついさっき目が覚めて、すぐに脱出しようと思ったんだがお前達が暴れていたのでのんびり見物してたのさ」

「何を——」

「……《鷹眼》のユキジ」

言っているのだ、と続けようとした唯の言を、ミクサが遮った。

「何処の国にも属さない拳法の達人。身の上は誰も知らないけど、噂では彼女の目からは誰も逃れられないとか」

「……へえ、よく知ってるじゃん」

ミクサの予想は的中したが、かえって相手の逆鱗に触れてしまったらしい。女——ユキジはゆっくりと両手を上げて、静かに構えた。思わぬ敵を生み出したことに一瞬目の前の奴隷を殴り飛ばしたい衝動に駆られるも、それどころではないと自分に言い聞かせて、唯は刀の柄に手をかけた。瞬間、

——グウ

「……殺されたくなければ食料を投げ渡せ！」

「もつ取り繕えねえよ——！」

思わず突っ込んだ唯君に非は無いよホント。

「ガツガツガツ……ああ美味かった、ごっそさん」

「盗賊共の食料を全て平らげるとは……」

あれから数十分経ち、唯はミクサにアジトの中にある食料を全て持って来させたが、目の前にいるユキジはその全てを平らげてしまった。というか、数十人分の食料を平らげるって、どんな胃袋をしてるんだこの女。

「いやあ、すまないね。ちょっと通り名を言われただけで感情的になるとか、まだまだ修行が必要だ」

「いや、後先考えずに口を開いたうちの奴隷のせいでもある。あまり気にしないで欲しい」

「それはありがたいんだけど……」

視線を逸らしたユキジの目の先には、ミクサが正座した状態で放置されていた。しかもただ放置されている訳ではなく、その辺りにあった石を膝の上に置いた状態で拘束されているのだ。

「幾ら奴隷でも、ありやちよつとやりすぎじゃあ——」

「あいつの顔見てみる」

それで顔を見たユキジは、すぐに背けた。見てはいけないものを見たかの如く。

「分かったろ？」

「いるんだねえ、被虐趣味の人間って」
マソヒスト

ちなみにミクサの顔はここでは描写できないので割愛させていただきます。

「……で、あんた私に聞きたいことがあるんじゃないのかい？」

「それはお互い様だろう。……まさかこんな所で出会えるとは思っちゃいなかったがな」

唯とユキジは互に見合わせ、口元を歪めながら同時に言い放った。

『あんた お前、地球から来ただろう？』

やあ、悪い子の皆。今日は新キャラ、ユキジについての説明だ。今回は下に人物紹介を載せておくから、各自それを参照してね。ドン！

穴戸雪路

職業 旅の拳法家（武者修行中にこの世界にやって来た）

人種 黄色人種

性格 大雑把

装備 鉄製のトンファー（×2）、チャイナドレス（赤色）、コンバットブーツ（黒色）、アーミーナイフ

備考 呼び出したのは流れの魔導士だったが、当人はすでに死去以降、彼女はこの世界を旅している。元々武者修行で半ば世捨て人だった為に帰郷意識は皆無。通称《鷹眼》のユキジ

以上。さてさて彼女は敵なのか味方なのか、今後の展開が楽しみだね。ではまた次回に会おう。さらば！

今回の調教

殴る1回（食料調達を命じる前に殴っていた）
石を抱かせて正座（正式な名前は忘れた！）

第12話

この世界で初めて見たのは、ちっぽけな部屋と今にも死にゆく老人だった。彼は私を呼び出すことに全身全霊を注ぎ、死の間際まで頼み込んできた。村を救って欲しいと。

この村は魔獣に襲われていたが、周りの国で救おうと動いてくれる者はいなかったらしい。だから老人は、古い書物から『勇者召喚』の魔法を見つけ出し、呼び出した私に全てを託して息を引き取った。『私の故郷を、頼む』

そう言い残して。

正直恨んでも良かったが、世捨て人同然の私にとっては些事にすぎなかった。何処であろうと変わらない。私はただ、『武人としての道』を極めるだけなのだから。

そして、……魔獣はあっさり死んだ。この世界では地球にいた頃よりも動きやすいとはすぐに気付いたが、それでも簡単に斃せた。簡単に殺せた。

村人からは感謝と畏怖の念を受け取った。だが私はどちらにも興味を持てなかった。私はただ、老人の遺言を聞いただけにすぎない。感謝ならその老人に言っただけいい、畏怖の念を抱きたければ勝手にしろ。そう言い残して、私は名も無き村を去った。

その後は地球にいた頃と変わらない、武者修行の旅を続けてきた。

「……と、言うわけだから、あんまり知っていることは無いわよ？」
「いや、十分だ」

盗賊のアジトを後にした唯とミクサ、そしてユキジは盗賊のアジトを後にして、近くの森の中で焚火を囲っていた。ミクサは周囲の警戒のために近くの木にもたれかかり、唯とユキジは適当な丸太や切り株に腰掛けて向かい合っている。先程まで、ユキジがこの世界に来るまで、そして以降の話を聞いていたのだが、唯は幾つか手に

入れた情報を基に思考を繰り広げた。

「……奴隷、お前は何処で『勇者召喚』の魔法を知った？」

「私も、正確には私の家でもその書物を見つけました。けれども、先程の話のように老人一人の力で呼び出せる程、整然とはしていませんでした。」

「つまり、その老人が見つけた書物の方がより精密だと？」

ミクサの方を向くと、彼女は首肯した。唯は視線を戻し、焚火をじっと見つめている。

「……こりゃちよつと骨だな」

「どういことだい？」

問いかけてくるユキジに、唯は思考を整理するように説明していた。

「おそらく基は一つだ。誰が考え出したかは知らないが、その魔法を書物に記録として残した。だが第三者が、この場合は編み出した誰かの弟子だと思うが、内容を完全、不完全を問わずに書き写し、各地に散らばってしまったんだ。だから不完全な『勇者召喚』の魔法があちこちに広がったんだ」

「それがどう骨なのさ？」

どうやら今の話は理解したらしいが、それが何を指すのかまでは分からなかったらしい。後ろで立っているミクサも同様の様だ。だから唯は説明を続けた。

「つまりある意味では……各国に最低でも一人、勇者という拉致被害者が居るんだ。しかも性質が悪いことに、中には国に協力的な者も召喚されている。そして勇者はある意味英雄、『力の象徴』だ。力があれば国はどうする？」

「戦争……」

正解だと、唯は静かに頷いた。焚火のはぜる音が耳にこだましている……。

「あんた、頭が回るんなら、その召喚魔法の対策も考えられるんじゃないあ——」

「無理だな。そこいらの書物——写本を見た所で召喚の魔法もその理屈も理解できない。原本を探し出すという手もあるが、今度は素質に関わってくる」

そう、この世界の魔法は素質に半ば左右される。幾ら才能があるうとも、素質がなければ特定の魔法は使えないのだ。確かにイメージも大事だが、それを確たるものにする素質が無ければ話にならない。

「だが手は無いわけじゃない。……要は原本もしくは編み出した張本人だけじゃなく、その素質を持った人間を用意すればいい。そうすれば召喚された人間の帰還も、魔法そのものの封印及び削除も可能となるかもしれない」

「けれども、どちらも手掛かりが……」

そう反論するユキジに、唯は静かに手を伸ばすと、ミクサの方に親指を向けた。

「こいつは俺の奴隷だが、呼び出した張本人でもある。つまり召喚魔法の素質を持っているんだ」

「……ならば原本か編み出した魔導士だけか」

これで当面の目標が決まった。下手な戦争を回避するために、自分達を呼び出した元凶を断ち切るという、何とも勇者染みた目標である。

「……俺は勇者なんて柄じゃないんだがな」

「私も一緒さ。むしろ勇者の仲間その1の方がしっくりくるっての」互いに苦笑するも、すぐに顔を引き締める二人。後はその原本もしくは魔導士だけだが、問題はその手掛かりだ。

「というわけで奴隷、今の話から推測できる魔導士に心当たりはあるか？」

まずは魔導士からあたることにした唯は、この世界の人間であるミクサに問いかけた。

だが彼女の答えは、二人を驚愕させるのに十分すぎる名前だった。

「……一人だけいます。呼び出されたのではなく、自分からこの世界を訪れた『最初の勇者』、《陰陽師》安倍晴明」

今回の調教

見張り（話もしていたので警戒は最低限）

尋問（ただの質問会）

第13話

翌朝。

「……ま、それだと納得だよな」

「何が？」

朝食を済ませ（適当な携帯食料やミクサが獲ってきた川魚）、軽く伸びをしながら呟いた唯の言葉を、目聡く聞きつけたユキジが問いかけてきた。

「俺達の国籍が一致してる理由だよ。世界規模で召喚対象を選んで
いるなら、まず揃うことは有り得ない。けれども召喚魔法の基を築
いたのが日本人なら、世界観が日本に集中している筈だ。つまりゼ
ロとは限らないが、日本人が召喚対象の大多数を占めているんだよ」
「ふん」

どうでもいいことか、とユキジは自らの荷物（宝のある檻の中で
見つけた）を身に着けた。服装は昨日のままで、腰には鉄製の
トンファ―が二本、むき出しの右の太ももにはアーミーナイフが
鞘ごと括り付けられている。

「私はこれから、最初にいた村にこつそり戻ってみるよ。あの年寄
りが他にも手掛かりを持っていたかもしれないし」

「そうか、俺達はそのままキール連邦に行く。何かあった時の連絡
手段はどうする？」

「……それならいいのがある」

そう言くと、ユキジは足元に置いていた荷物から一本の笛を取り
出して唯に手渡した。

「こいつは一種の犬笛だね。けれども聞き取れるのは全生物の中で
私だけさ。しかも、世界中の何処にいても聞こえる」

「成程。何かあれば笛を吹けばいいと。お前さんの時はどうする？」

「武闘大会なりで新聞に名前を載せる。あんたはその度に笛を吹い
てくれさえすればいい」

後は勝手に探す。そう言い残して、ユキジは背を向けた。そのまま去ろうとするが、その背中に唯が声をかけた。

「ところで、『鷹眼』ってどういう理由でつけられたんだ？」

「……大したことじゃないさ」

背中越しに振り返って、ユキジは口元を歪めた。

「私は『遠目』の魔法が得意だからさ」

後はもう立ち止まらなかった。ユキジの背中が視界から消えるまで、唯はそのまま突っ立っている。

「……成程。盗賊退治の間も、ずっと覗いていやがったのか」

軽く呆れた唯も後ろを向くと、今度は近くの木の下へと歩を進めた。

「それで、反省したか？」

「……ご主人様、頭が破裂しそうです」

目の前にはミクサが、足首を縛られて逆さに吊らされていた。魚を獲りに行くまでの間に唯が仕掛けた罠に引っかったのだ。ちなみに何故こうなったかというと、野宿中にも関わらず、ミクサが唯の寝袋に潜り込もうとしたからだ。無論、服を脱いで下着のみになった状態で。追記しておくとして現在はちゃんと服を着ているのであしからず。あ、スカートは思いつきり捲れているよ、色気も何もないけど。

悪い子の皆、久しぶりっ」

昨日は来れなくてごめんね。実は休暇を取って家で寝ていたんだ。これからも偶に休むかもしれないけど、僕の場合は気にせずこの小説を楽しんでねっ」

さて、今日はこの世界の衣類事情について教えるよ。この世界では中世ヨーロッパの衣装を意識してくれれば、概ね間違いないんだ。でもゴム製品とかの加工技術は発達していないから、殆どの衣服は紐で縛って身に着けるんだ。なので必然的に下着類は当て布に紐をつけたような代物（例：褲、紐パン等）だけど、それを意

識してこの小説を読んでも色っぽいシーンなんて期待できないんだから、そういう無駄な努力（妄想）はむつつりな良い子達にやらせて、僕達悪い子は他所で妄想しようね♪

「あゝたゝまゝが………」

「さて、行くか」

未だにふらつくミクサの手綱を握り、唯は一路キール連邦へと向かっていった。ミクサの髪は多少乱れていたが、特に気にすることなく覚束ない足取りで唯について来ている。

今歩いている馬車道はあまり人が通らないのか、徐々に荒れだしている。この先にある町は2つあり、2つ目の町からさらに3日歩けばキール連邦に着くことができる。

「とりあえず次の町で何日か休んでからキール連邦に向かうか」

「……急がなくていいんですか、ご主人様？」

ミクサの疑問に、唯は何を下らないことを言ってるんだと蔑んだ眼差しを向けた。

「元々阻止しようとしているのは、俺が今後起きるであろう戦争に巻き込まれないためだ。先の危険のために今も危険に晒されたら、それこそ本末転倒だろうが」

馬鹿馬鹿しいと前を向く唯の背中を見つめながら、ミクサは胸中で思い悩んでいた。果たして本当に……これでいいのかと。

そして2人は日が沈み始めた頃になってから足を止め、再び野宿の支度を始めたのであった。

今回の調教

逆さ吊り（片足ではなく両足を縛られた状態で）

第14話

最初に見た時はさすがファンタジーだと感心した。

目の前にいるのは映画で見る恐竜の如き巨体。全身は灰色の鱗で覆われ、鋭い爪を生やした手足が威圧を込めて向けられている。口からは牙が伸び、さらにその上に位置する瞳は明らかに捕食者のそれだ。

——ぐりゅおおおお……！！

馬車道を歩く中、突如現れた巨大生物——竜を見た唯は、

「やかましい」

鞆から取り出した小瓶を竜の口に放り込んだ。それを飲み込んだ竜は気にしたことなく突っ込んでくるも、その直前で斃れてしまう。徐々に痙攣し、瞳を充血させ、爪と指のつけねからは血が流れ出している。

「……ご主人様、これは——」

「護身用だ。触らない限り問題ないし、少し経てば感染力もなくなる」

ただ叫ぶだけで耳障りだったと、唯は思いながら竜に背を向け、先を急いだ。

さて、何でいきなり時間が飛んだのかを悪い子達に説明しよう。

というか彼らも、ちゃんと自分達の行動を皆に教えればいいのにね、恥ずかしがり屋なのかな？

彼らは野宿で一夜を過ごし（また襲い掛かったミクサちゃんは、罰として朝食を取り上げられました。可哀想に）、夜明けと共に旅路についたんだけど、町まで後半日つてところで突如、竜（マウスドラゴン。ここ伏線）が襲い掛かって来たんだ。けど相手が悪かったよドラゴン君。君は生物の本能としては正しいことをしたけど、理性を総動員させて別の獲物にするべきだったね。合掌。

さてさて日暮れ前に町に着いた唯とミクサの二人は、直ぐに宿の部屋を取って街に繰り出したんだ。そのまま匂いに釣られて少し大きな食事処に入ったのはいいんだけど、まさかあんなことになるなんて。さあさあ悪い子の皆注目だよ！ はたして彼らの運命や如何に！！

（必ずしも、“彼ら”が唯とミクサの二人を指すとは限らないんだけどね♪）

「全員聞け！！」

町の食堂に突如現れて声を張り上げたのは、まだ20歳にも満たない少年だった。しかも、見た目はどう見ても日本人である。彼は幅広の剣を背中に差し、お供に赤髪の女性と青髪の男性を引き連れていた。彼らも武装し、各々髪の色と同じ装飾をしたレイピアを携えている。

食堂に居た殆どの人間が注目したのを確認すると、彼は大きな声で名乗りを上げた。

「我が名はミルドラスの勇者、オクティール・シユタイナー！

協力を願いたい！！」

そう言い切った彼に向けられたのは――哄笑だった。

「なっ！？ 俺は勇者だぞ！！ 笑うなー！！」

後ろに控えていたお供二人も、食堂に居た人間を諷めようとするも、返って煽り上げてしまい、食堂内は笑いに包まれていた。

「……ミルドラスって何処だ？」

「随分、前に（ゴクン！）、臣下や国民が一挙して逃げ出した、北にある廃国寸前の村です」

食堂の2階。いつも以上の量の食事にありついてた唯とミクサは、冷めた眼差しで階下にいる勇者を見下ろしていた。

「村なのに『国』寸前？」

「村なのに『国王』が居たんです。いわば田舎ですね」

「成程、田舎者が」

周囲が笑いだす理由を理解した唯は、そのまま食事を再開した。テーブルの下で犬食いしているミクサも、朝から何も食べていなかったためにすごい勢いで食事にありついていて（2人共竜に遭遇したために昼食抜き）。

しばらくしたらこの哄笑騒ぎも収まるだろうと食事を続けていたのだが、思っていたより『自称』勇者殿は我慢弱かったらしい。

「『Inferno——煉獄』!!」

突如オクタイール（おそらく本名ではない）は叫び、魔法を行使して食堂の床板に叩き付けた。床にはテーブル大の穴が開き、周囲の空気を焦がしていく。

「いいから俺の話聞け!! この中にマウスドラゴンを殺した奴が居たら名乗り出る!!」

勇者の心構え云々はともかく、どうやら狙っていたマウスドラゴンを横取りされたことに腹を立てていたらしい。実際、2階の他の席にいた人間の中に、

「そつえば懸賞金が掛けられていたな……」

とか呟いていた者もいたので、間違いはないのであろう。人々を救うためか、懸賞金のためか（おそらくただの見栄だ）。

「関係ないな」

「あの、ご主人様……」

何だ、とテーブル下のミクサを見下ろした唯。彼女はこうしたものかと悩む素振りを見せながら、こう囁いてきた。

「ご主人様がここに来る前に倒したのが、そのマウスドラゴンですよ」

「あんな弱いのが!？」

思わず声を張り上げてしまった唯。しかも階下にいたとはいえ、自称勇者の田舎者御一行に聞かれてしまったようで、彼らがすごい勢いで2階に駆け上がっているのが視界の端に映っていた。

今回の調教

飯抜き（結果的に唯も一食抜いていた）

第15話

「今の話はどういうことだ!？」

「……まあ、落ち着け」

いきなりテーブルの向かいに腰かけてきた自称勇者を宥めつつ、唯は後ろに控えているミクサの足をすごい力で踏みつけていた（当人は興奮をかみ殺すのに必死だったとか）。

「確かに俺達はそのマウスドラゴンを倒しはしたが、そちらが探しているものとは別の可能性があるんだ。そもそも懸賞金を掛けられるようなドラゴンが、人間2人、実質俺1人で倒せると思えるか？」

「……つまり、偶々遭遇したマウスドラゴンの幼生を倒した、と？」
「襲い掛かって来たから倒したんだ。大体、そんな懸賞金掛けられるような生物にお目にかかれる方がどうかしているだろうが」

そう説くと、向こうも納得したように腕を組んで頷きだした。

「成程、そう考えると辻褄が合うな」

「だろ、そもそも幼生ならともかく、成体のドラゴンがたかだか小瓶1つで眼球が充血して爪の間から血液垂れ流して絶命するかよ」

実際に唯はそう信じて疑わなかったが、目の前にいるオクタイールの顔は徐々に険しくなっていく、最後に怒鳴りつけてきた。

「俺が狙っていたマウスドラゴンの死因と一致してんじゃないかねえか!？」

「……ええ」

唯は思わず落胆してしまった。結構楽しみにしていた上位のドラゴンが、実は地球の技術であっさり死んでしまう代物だったとは思わなかったのだ。

「うわゝ夢が壊れる」

「そんなことはどうでもいいんだよ!!」

いきなり剣に手を伸ばそうとする勇者をお供の二人が必死になって食い止めている間に、唯は八つ当たりと奴隷を大人しくさせるた

めに、ミクサを踏みつけていた足の力を上げた（相手が剣に手を伸ばそうとした瞬間、ミクサも鉄扇に手を伸ばそうとしていた）。
ハリセンもどき

「俺の活躍をぶち壊しやがって、この落とし前はつけさせてもらうからな！」

「（ボソツ）勇者のセリフかねえ……」

呆れる唯を尻目に、オクタイトル（確実に自称だろう。思いつきり日本人的な丸顔だ）は感情的なままお供の二人に指示を出していた。ちなみに唯の呟きを聞いていたのは、傍にいたミクサだけだったりする（彼女も同意見）。

「アイ、カイ。今すぐ決闘場の手配だ！ この男を血祭りに上げるぞー！」

『御意』

「いやいやちよつと待て、何故決闘なのかをまず説明しろ」

だが彼らは唯達の話の聞かないまま、その場を後にしてしまった。
「明日正午、この町にある決闘場に来い！ 自分の国の誇りを傷つけたくなければ逃げるんじゃないぞー！」

さも唯達が決闘に臨むかのような捨て台詞を残して。

さてさて、今日はマウスドラゴンと、決闘場について説明しよう。
まずマウスドラゴンっていうのは、その名の如く地球でいうところの鼠に当たるんだ。ここでは地球という害虫、害獣の類が竜として活動しているから、もしかしたら例のGも竜として存在しているかもね。

次に決闘場だけど、これは早い話公の処刑場なんだ。任意で殺し合いをしたってことを法的に認めさせて、いざ殺人者になっても犯罪者にしないための処置なんだけど、実質は弱者をいたぶるために残された、強者の遊び場なんだ。ほんと勇者召喚といい、この世界は腐っているね」

「……感情論で国の誇りも何もないだろうに」

「それ以前にミルドラスに今更誇り云々に拘るとは思えないんですが……」

あまりの馬鹿馬鹿しさに敵意すら抱けない二人は、どうしたものかと席を立った。

「……ところでご主人様」

「何だ？」

カウンターで精算を終えた唯に、ミクサはどうしたものか、という気持ちで問いかけた。

「彼らの決闘、挑むんですか？」

「そうだな……」

店を後にしつつ、顎に手を当て考え込んだ唯は、ぼそりと呟いた。
「……予定変更だな」

二人はそのままの足で宿に戻り、一晚を過ごしたのであった。そして翌朝、二人は宿を後にする。

次話は最近ストーリーを優先しすぎてできなかった、二人の熱い一夜を一部公開します。会話オンリーですが、どうかお楽しみあれ。ちなみに気分を盛り上げるために、本日午後9時に更新します。

そしてもちろん、悪い子の皆は分かっているよね？ そう、この小説でイヤんな展開は期待できないことを（グロイことは期待できるかもけど）。では、盗聴（ゲフンゲフン！！）もとい彼らの部屋の様子を、会話だけでも拝聴しましょう……。

今回の調教

足踏みつけ（途中から力を込める量を増やした）

第15.5話

注意：よくよく考えたら盗聴もとい耳を傾けている最中なので、擬音等が紛れ込むこともあるけど、悪い子は気にせず聞いてね。例えば盗聴で捕まっても、罪は良い子達に全部被せてしまえばいいんだからさ。

——ガチャツ（扉の開閉音）

「……ハア、さっぱりした」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「おう、お前も——!?」

——ガタツツ（近くのテーブルにぶつかって、床と擦れた音）

「なんだその恰好は！？」

「これですか、ご主人様が先程湯浴みをなさっている間に偶々訪れた商人から購入したのですが……気に入らませんでした?」

「その金は何処から出した!？」

——ガダッ、ガラガラ……（テーブルが揺れ、上に載っていた木のカップが床を転がる音）

「私のへそくりです！　こんなこともあるうかと隠し持っていた金
トレード品と等価交換しました！」

「……つまり、奴隸の分際で金になりそうなものを主人に黙って隠し持っていたと？」

「お言葉ですがご主人様」

——パタ……パタ……（ミクサの足音、おそらく唯に近づいている）

「これは正当な労働で得た私の報酬です」

「労働？」

「はい。ご主人様との熱い一夜を過ごすために、私は報酬を頂戴したのです」

「一応聞いておくが……労働内容と報酬を与えたのは誰だ？」

「この前の盗賊退治の折に強奪もとい徴収した金品から幾つか、自主的に拝借しました」

「主人に黙ってネコババしてんじゃねえ!!」

——ガンツ!!（ミクサが蹴飛ばされて、壁に叩きつけられた音）
「……他にネコババしたのは何処にある？」

「既に換金済みで、荷物の奥に袋詰めで隠してあります」

「そうかそうか……没収だ馬鹿野郎!!」

——バツ!!（唯がミクサの手荷物を持つ音）

——バササツ!!（荷物を床にぶちまける音）

——ダッ!!（ミクサが駆け寄る音）

「後生ですご主人様！　せめて私の物に掛ける分だけでも——」

「元々俺が金銭面を管理するつもりだったんだ！　必要な物はちゃんと買い与える!!」

「でしたら宿の裏手にある店の（自主規制）な下着を——」

「『必要な物』だと言っただろうが!!」

——ダンツ!!（ミクサが床に叩きつけられる音）

「……フ、フフフ。とうとう私を呼び起こしたわね唯く——」

「だから下らない理由でS化してんじゃねえ!!」

——バキッ!!（何かが折れた音）

「ぐっ、例え嗜虐的な私（以降はSミクサと命名）を倒しても、第2、第3の私が貴方の前に必ず立ち塞がる——ゲヒッ!？」

——グシャッ!!（何かが潰れた音）

「お前は魔王かつ!？」

「（Sミクサ退場）……どちらかと言うと、ご主人様が魔王で私はその忠実な部下——っ!？」

「だったら主である俺に服従しやがれっ!!」

——バシッ!!（何かを踏み潰した音）

「……ご、ご主人様、もっと私を痛めつけて、ウヒヒ……」

「安心しろ。今度は2倍の量を投与してやる」

第16話

『昨夜一晩考えたのだが、そもそも国はとくに滅んでいるので今更誇りも何もあつたもんじやない。というか感情的になつただけの糞餓鬼相手に敵意すら抱くことができないでいる自分がいる。なので馬鹿らしくなつたので俺はとっとと先へ進むことにした。面倒くさいから追いかけてくるなよ。』

追伸1 決闘の放棄による法的効果は無いことを追記しておく。そもそも承諾した覚えすらない。

追伸2 迷惑料として宿代立て替えとけ。

以上』

「んだとこらーっ!？」

決闘場に現われた宿屋の主人に渡された手紙を読み、（自称）勇者オクタイルはブチ切れて暴れ出した。手紙をビリビリに破き、主人の胸ぐらを掴んで問いただす^{マッ}与作（彼の本名は山田与作）。

「あいつ等は何処行つた!？」

「……お客さん」

後ろに控えていたアイとカイも武器に手を掛けているが、主人は冷静にオクタイルの手首を掴んだ。

「いいから金払えや」

描写し忘れていたが、主人の風貌は身長2mの巨漢で上腕は子供の胴体くらい盛り上がっている筋肉質^{マッ}だった。さてさて勇者達の運命や如何に、まて次場面!!

さて悪い子の諸君（大体2週間経つし、もう良い子は読んでない

よねっ)。今日は(自演乙)勇者パーティーについて紹介しよう。
ドン!

山田与作

職業 無職(引きこもりの高校生)

人種 黄色人種

性格 自意識過剰

装備 勇者の剣(ミルドラス製の鉄剣)、勇者の鎧(中古品を改造したもの)

備考 ミルドラスの(自称)王族が廃村(当人たち曰く廃国)を避けるために呼び出された。体力や戦闘技術云々はからきしだが、全ての魔法に関して素質がある(本人は気づいていない)。現在オクタイール・シュタイナーと名乗っている。現在アイとカイという従者(王族の数少ない子息。後1人、サイという息子が村に残っている)がいる。

さてさて、一方唯達2人は今何処に居るのかな。さあ視点を戻そう。

「……危なかった」

「もう少しだったんだけどな」

どうでもよさげに歩いて行く2人は一路次の街へと向かっていた。今回は次の街までの道のりが短いので、半日もあれば到着する予定だ。……何も問題がなければ。

「……待て待て待て待て!!」

「……ん?」

何事かと後ろを向く2人が見たのは、物凄い勢いで荷車を引いているアイとカイ(おそらく魔法を掛けている。『強化』あたりを)と、荷台に乗っている自称勇者、オクタイールだった。

何故かボロボロな彼らは唯達の前に回り込むと、威圧的に並んで立ち塞がった。

「何なんだあの手紙と筋肉達磨は！？ お陰で有り金全部持ってたぞ！！」

「……あゝ」

「ご主人様、何やっただんですか？」

軽くジト目を向けてくる奴隷の後頭部を小突き、唯は自称勇者達に向けて話しかけた。

「必要なことは手紙に全部書いただろうが、主人に関しては知らん。昔傭兵だったと聞いたただだからな」

「傭兵の時点で止めるよ！！ それと何なんだよあの金額は！？」

「ちよつと朝飯贅沢しただけじゃないかよ、いちいち気にすんな」

頭を掻きながら呑気に返した唯だが、既にブチ切れているオクタールには油どころかガソリンだった。

「てめえ！ いいか、俺は勇者だぞ！！ ボロボロの廃村に追い込まれたミルドラス王家を救い、いずれは闇色の雪地方に住む魔王を倒す存在だぞ！！ 俺を見下してんじゃねえ！！」

「……ハイハイ」

また馬鹿らしい作り話を聞かされてるな、と聞きたくもないことを聞かされて多少苛立っている唯を、自称勇者は本気で苛立たせてしまった。

「いいか！！ そこの人間が勇者様に従うのが常識だろうが！！ その常識を無視してんじゃねえ！！」

「……アア？」

ある意味ではオクタールに才能があった。人を怒らせる才能が…… 本気で唯を怒らせたのだから。

今回の調教

小突く1回

過剰請求（対象：勇者一行）

第17話

「奴隷、下がってろ……邪魔だ」

「は、はいご主人様！」

慌てて下がるミクサを気にせず、唯はゆつくりと前へ進んでいった。

「成程、お前は悪党か。勇者に倒されるべき存在だな。だからこそお前はいたいけな少女を奴隷にしている。それなら容赦する必要はないな」

手振りでアイとカイに指示を出すオクタイール。勇者だからこそとかいう常識に吞まれた3人は、既に唯を見ていない。各々武器を携えていくが、唯は構わず刀の柄を握り、

——斬！

……切り裂いた。

「あ、ああ……」

「なっ！ はや——」

先に突っ込んできたアイとカイの腕を全て切り裂き、地面に叩き落としてから唯は右手に刀を持ち、左手には腰に差した短剣の柄を掴んで引き抜く。呆然としている2人の頭にそれぞれ刃を突き刺し、絶命の確認をする間もなく手を離して前へと歩いていく。

「フン、例え二人を倒しても——『inferno——煉獄』！」

死んだ2人に対しては何も思っていないのか、オクタイールは即座に魔法を唱えた。右手には暗い炎球を携え、唯に投げつけてくる。人の死よりも、勇者の使命とやらに酔っている彼に、唯は黙って右手を持ち上げ、

「……『inferno——煉獄』」

自称勇者よりも巨大な業火にて迎え撃った。

「なっ！？」

オクタイールの魔法は打ち消され、唯の魔法の残滓が勇者を炙り

焼いていく。

「ぐっ、ぐあああ……」

地面に転がって身体中の火を消す勇者を、唯は近づいて踏みつけた。

「がっ!？」

「……まるでゲームだな」

オクタイルは唯の足を退けて立ち上がろうとするも、踏みつける足を退ける力は、彼にはなかった。

「気づいているか、お前の魔法。……昨日食堂で見せたのとまったく同じ威力だったぞ」

唯は懷からシガーケースを取り出し、煙草を一本抜いて口に咥えた。

「この世界の魔法は、大抵のものならイメージさえしつかりすれば使える。逆を言えば、イメージを変えるだけで魔法の威力を調節できる。……先にお前が出した炎以上のものをイメージするだけだな」

「な、何を……」

「『Fire——火』」

煙草の先に火を点け、静かに紫煙を吐き出す唯。

「奴隷! ……刀をその死体から抜いて持ってこい」

「は、はい!」

背中越しでは見えないが、ミクサはおそらく死体と格闘しているだろう。だが唯は構わずに、勇者をじっと見下ろしている。

「お前、なんで——」

「……これは現実だ」

煙が舞う中、唯は静かに告げる。その顔は何処までも冷徹で、何処までも無情だった。

「人が死んで、殺されていく。地球だろうと異世界だろうと変わらない。……人は簡単に死んでいく」

差し出された刀の柄を握り、垂れたままの刃を右手だけで振り拭いた。

「お前！？ 俺と同じ——がつ！！」

「一緒にするな若造」

逆手に持った刀を相手の方に突き立てる。かすらせたのではない、肉体に刃で風穴を空けたのだ。

「現実も知らない糞餓鬼が、なんでも思い通りにできるわけがないだろうが。……何か言いたいことはあるか？」

身を屈めて顔を近づけてくる唯に、オクタイールはもがきながらも口を開く。

「てめ、どんなそだち、かたをし、てやが、る？ おやのか、おがみて——」

「……なら会わせてやるよ」

オクタイールは目を背けた。見たくなかったのだ。その瞳は――

「何故なら……既に俺が殺しているからな」

何処までも空虚に染まっていた。そして勇者の首は刈られる。

勇者オクタイール「シユタイナー、本名山田与作の最後は、驚愕に彩られ、それ以外の色を塗り潰していた。

「ご、ご主人様……」

「……行くぞ」

もう興味を失くした死体を蹴り飛ばし、他の死体に刺した短剣を抜き取ると、軽く血を払って刀共々鞘に戻していく唯。ミクサは何も話すことができなかった。

……あの時と一緒にだ。初めて出会った時と。

今回の調教

都合により無し

第18話

……あれから3日経った。

次の街に着いた2人は適当な宿を取り、そこで寝るだけの日々を過ごしていた。ミクサは唯を外に出そうと誘ってみるも、彼は既に吸殻と化した煙草を咥えたまま窓際に腰掛け、ずっと外を見ている。唯一の例外は食事と用足し、睡眠くらいだろう。

どうしたらいいのかと悩むミクサは、ただじつと座り込んでいる床の上から見つめているだけだった。何秒も何分も何時間も、もしかしたら何日も、になるかもしれない。元々何日か滞在する予定だったが、いくらなんでもこの状態が続く限り、唯に休まる暇はない。

「……ハア」

小さく溜息を吐くと、ミクサは静かに立ち上がり、部屋を出て行った。気づいているのかいないのか、唯はそれを咎めることはしなかった。

「……どうしようかな？」

適当な飲み物（リング汁を水で溶かしたもの）を持ち合わせていた小銭で購入し、口に含みながら市を巡回していた。国と国の間にある町ながらも、国に近いためか賑わいを見せている情景にミクサは、周囲の人間とは対照的な眼差しを向けている。……“つまらない”のだ。

「……………」

左手に木彫りのカップ（器の態を成しているだけの代物）を持つたまま歩いているミクサの空いた右腕は、無意識に首の所へと持つていかれる。指先で奴隷の証である首輪（手綱は今外してある）に触れ、その上に位置した瞳は天を仰いでいた。

——むしろお前が勇者だろうが

空っぽな頭に響くのはかつて言われた言葉。初めて出会った時に

言われた言葉。それからだ、『 』になろうともがきだしたのは。その時から覚悟は変わらない。何もない、何もかも失った私に残されているのは……。

「……うん！」

覚悟を決めた、いや思い出したら後は早い。

ミクサはカップを手近なず箱に放り込むと、足早に宿へと戻って行く。

やあ、悪い子の諸君。今日からしばらくは、ビデオ学習の時間だ。ちよつとした過去話だけど、一見の価値ありだよ。

さて今日のビデオは……ミクサちゃんの勇者召喚のシーンだね。ではオンエア♪

『Provide——供給』！！』

グランロデオ城の中にある儀式場。円を描く様にして配置されているのは宮仕えの魔道士達。けれども1人だけ、巫女装束に身を包んだミクサが居た。彼女は魔道士達から供給された魔力を練り上げ、とある魔法を行使しようとしていた。そう、勇者召喚の魔法を。

『……Summon Braves——勇者召喚』！！』

最初は膨大だった魔力が、次々と消化されていく。それだけでは足りないのか、体力ですら貪り喰らう魔法に、ミクサは額から汗を流した。徐々に輝きだす眼前に見たのは、一人の青年だった。こことは違う衣服を身に纏い、その眼光は油断なく、周囲を観察していく。後ろに控えていた近衛兵が彼に近寄り、事情を説明していく。その中でミクサも紹介されたようだが、当の彼女は疲れきっていて、気づくことは無かった。

けれども通りすがった彼から聞かされた一言が、空虚だったミクサの価値観を一変させてしまった。

『——むしろお前が勇者だろうが』

「……………俺という悪から、世界を救ったのだから」

宿の一室、ふと唯の口から漏れ出たのは、かつて彼が呟いた言葉の切れ端だった。だがそれだけだと、啞えていた煙草を吐き捨て、唯は辺りを見回した。すると丁度、扉が開いて、ミクサが部屋に入って来ていた。

「……何処行つてたんだ？」

「少し、考えることをしたくて……」

扉を閉めたミクサは、ゆっくりと唯に近づいていき、僅か一步で詰め寄れる距離で止まり、棒立ちになった。

「何だ？」

「少し話がしたくて。……“奴隷”としての私ではなく」

一旦言葉を区切ると、ミクサは両手を持ち上げ、首輪に手を掛けた。簡単に指だけで金具を外すと、首輪を右手に持って、ぶら下げたまま唯を見据えた。

「“対等の立場”としての私として」

「何を——」

言っているのだ、という唯の問い掛けは、ミクサの左手から来る、

——パン！

平手に遮られてしまった。

「……どういふつもりだ？」

「さっきも言つた通り、」

そこにいるのは奴隷としてのミクサでも、ましてや偶に現われるSミクサでもない。

「貴方と話がしたいのよ。対等の立場として」

元来のミクサが立っていた。

今回の調教

都合により無し

第19話

「……対等？」

「そうよ」

互いに見つめ合う二人。けれどもその視線は、今にも火が付きそうな導火線を彷彿とさせた。

「ずっと考えていたんだけど、グランロデオを滅ぼしたあれは、何の為に用意したの？」

「ハン！……あんなもんだの趣味だろうか？」

下らない、と一笑する唯に畳みかけるかのように、ミクサは言葉を繋いでいく。

「へえ、じゃあ貴方は高々趣味で、……自分の命すら危険に晒したの？」

「……っ！？」

思わず立ち上がる唯を見据えたまま、ミクサは口を開き続けた。

「貴方は前居た場所を滅ぼそうとした。いや、もしかしたら周りも巻き込んで自分を含む生物全てを消し去ろうとしたんじゃないの！
？ 自分一人で死ぬのが嫌だから！！」

「……れ」

「そう考えだしたら、全ての辻褄が合ってくる！ あの時貴方が言った『むしろお前が勇者だろうが』という言葉も、勇者に仕立て上げられた最初は無駄に従順だったことも！ 貴方は最初から自分のことを『死んだ人間』だと考えているとしか思えない！！」

「黙れっ！？」

——ガッ！！

唯の拳が、ミクサの頬に突き刺さった。けれども彼女は、拳が当たっても話すことを止めない。

「……何があつたの、貴方に。何が貴方をそうさせたの？ 何で地球に帰りたいがらないの？ そこの人間ならホームシックで泣きだ

してもおかしくないのに、貴方は平然としている。いやむしろ、帰るという意識すら感じられない！　じゃなきゃ最初に帰る方法を聞いてきた時に、何もできない私をもっと痛めつけてもおかしくなかった！！」

「黙れと言っているのが分からないのか！！」

——ドンッ！！

思わず出た一撃が、ミクサの身体を宙に浮かせて、床の上に転げ倒させた。右手にぶら下げていた首輪も転がり、髪先で束ねていた紐も解け、蒼銀色の髪が床一面に広がっている。

「お前、本当は——」

「狂ってる、とも思ってた？」

口から零れる血を拭い、足をふらつかせながらもミクサは立ち上がった。

「別に何でも良かったのよ。奴隷だろうと何だろうと、……貴方が必要としている者になれるのなら」

いつもならこの状況を楽しんでいる筈の奴隷ミクサに、唯は一步、後ろに下がってしまった。

「貴方、自分で親を殺したとか言ってたわよね？　じゃあ聞くけど、貴方に味方は居ないの？」

「何を言って——」

ふらつく足取りで唯に近づいたミクサは、そっと右手を突き出した。

「……私が貴方の味方になる。道具でも飼犬でも奴隷でも主人でも宿敵でも好敵手でも勇者でも巫女でも魔王でも相棒でも仲間でも従者でも使用人でも知人でも友人でも恋人でも伴侶でも何でも構わない！！　私だけでも貴方の傍にいます。……だから」

「だから……自分を蔑ろにしないで」

「……さつきから次々と、フザケタことぬかしてんじゃねえ！！」

——ドコッ!?

唯はミクサの手を払い、その腹に足の爪先を突き立てた。元々土足な為、履いていたブーツでその威力は普通よりも大きかった。あまりの衝撃に、ミクサは何一つ、言葉にすることができないでいる。「俺が何時、誰を必要とした!? 好き勝手ほざきやがって!!」

激昂した唯に為す術なく、ミクサは身体中を蹴られ続けた。それでも彼女は、ただ唯を見つめ続けている。

「なんだよ? んな目で見てくんじゃねえよ!!」

顔を蹴られ、ミクサは一瞬気が遠くなるのを感じたが、霞む視界に映った一点に、

「こんなくだらないものいちいち用意しやがって……!」

慌てて起き上がると、転がるようにして自分から唯の足を受けた。その下にある首輪を守るために。

「……どけよ」

「どかな、い……」

左手が痛む。もしかしたら折れているのかもしれない。にも拘らずミクサは奴隷の証である首輪を守るために、身体を丸めて唯の攻撃を受け続けた。髪は乱れ、服は所々ボロボロに破けていくも、そこから動こうとしない。

「何だよ、喜べよ! お前の大好きな暴力だろうが!？」

「こん、な、の。き、もち、よくな、い。こん、な。やつあ、たりの! ぼう、りよくな、んて! ただ互いの心を傷つけあってるだけじゃない!!」

「こいつ……!!」

まだ動く右手で首輪を抱きしめるミクサの腹部に、唯の蹴りがまた突き刺さって、再び宙を浮いた。叩きつけられたのは床ではなく、部屋の扉だった。

今回の調教

都合により無し

第20話

——ドン——！！

「出てけっ！！」

——バン！ バラバラ……

「なっ！？」

上の階が騒がしいと、宿屋の娘であるエリカ・ジェラスが様子を見に行くと、丁度誰かが部屋の外に追い出され、荷物や硬貨を叩きつけられていた。ボロボロな女性を見つけるや、すぐに駆け寄って行った。

「大丈夫ですか！？ …… ちょっと——！！」

確か部屋には二人組が泊まっていて、彼女はその内の一人だ。内輪もめだか何だか知らないが、これはいくらなんでもやりすぎだ。

だが部屋に乗り込もうとする彼女を、

「や、めて……」

虚ろになりながらも、ミクサの右手が彼女の服の端を掴んだ。制止されて初めて気づいたのか、彼女の怪我が酷いことを察知したエリカは、

「母さん！ 母さん、早く来て——！！」

慌てて宿屋の女将である自分の母親を呼んだ。

さてさて悪い子の皆、昨日はゴメンね。後今回はビデオもちよつと無しなんだ。もしかしたら次の話が一本丸々ビデオになるかもしれないけど、その辺りは勘弁してね。

「……ん？」

最初に見たのは天井だった。その時点で漸くベッドの上に寝かされていると気付いたミクサは起き上がろうとするも、全身に来る痛みに断念する。それどころか、悲鳴すら漏れかねなかった。

「おや、気がついたのかい？」

顔を声のした方に向けると、ベッド脇の椅子に女性が腰掛けていた。歳は30を軽く超えてそうだが、それでも若々しい人で、手に持っていた編み物を膝に置いて覗きこんできた。

「話はエリカから聞いているよ。相方にボロボロにされて、部屋から追い出されたんだって？」

「……はい」

視線を逸らすミクサに、女性はリーンだと名乗ってから、話を切り出してきた。

「相方の方はそのままだよ。エリカ、あんたを見つけたうちの娘だけど、その子が部屋に殴りこもうとしたけど、ちゃんと止めてあるから、向こうには何にも聞いちゃいない」

それを聞いて安堵したミクサだが、リーンは軽く息を吐いてから、視線をベッドに、ミクサに向けた。

「だけど、この部屋はあんた達の居た部屋の真下に位置しているんだ。しかも娘に呼ばれるまで、あたしはここに居たんだよ。……この意味、分かるね？」

「……声、聞こえてましたか？」

「怒鳴り声なんて特に、ね」

事情を知られていることに及び腰になるも、そんなミクサに構わず、リーンは微笑みかけてきた。

「安心しな。細かいことは聞かないよ。むしろこちらも、同じ穴の貉さ」

「……え？」

驚くミクサに、リーンは指でベッドの反対側、食器棚の方を指差した。そこには仕舞われた食器類の他に小さな肖像画が飾られており、その中で二人の男女が微笑んでいる。

「うちの旦那も、『勇者様』なのさ」

「そうだったんですか……」

肖像画を見つめるミクサに、今度はリーンが問いかけてきた。

「今度はこちらの番だ。聞いてた限りじゃあんだ、あの男に随分入れ込んでたみたいだけど、何があんだをそうさせるんだい？」

「……明確な理由ではないんです。ただ御存知ですか？」

——『勇者』に選ばれる人間の条件を。

「……勇者に選ばれる条件？」

「はい……」

リーンは思わず聞き返してしまった。それはそうだろう、彼女は召喚に関わってなかったのだから。

ミクサは静かに、ただただ何かを懐かしむかのように、何かを遠く見つめるように語り始めた。

「勇者に選ばれる人間の条件は3つ。一部でも全体でも、魔法に関する資質があり、かつ魔力の容量が人並み外れていること。ある世界の島国に召喚する時点で存在していること。そして……誰から必要とされていないこと」

その話を聞いて、何かに気付いたのかリーンは口元を隠した。表情の変化を隠すように。

「誰からもって——」

「そう、あの人を必要としてくれる人は、元居た場所には居ない」

——だから私は、あの人に必要とされたいんです。……私も『勇者』だから

今回の調教

都合により無し

第21話

さあ悪い子の皆、今日はビデオの日だよ。ミクサちゃん視点で、グランロデオに起きたあの出来事を一週間分ハイライトでお送りするよ。それでは再生！

「勇者よ。汝の名は？」

「……美倉唯。家名が美倉で、名前が唯」

玉座の間にて、形だけの勇者の誓いを立てているのは、今日『召喚』したばかりの青年男性。王族はただ都合のいい駒を手に入れたと考えているのだらう。口調は丁寧ながらも、態度は明らかに上からのものだ。

「……勇者、か」

『——むしろお前が勇者だらうが』

……私が勇者？ 笑い話にもなりやしない。

こけおどしの剣を送られている。どうやら終わったようだ。大方、無理矢理どこぞの魔物や犯罪者を討伐させたり、新種の魔法の実験台にでもするんだらうな。

「巫女エシユリー」

「……はい」

呼ばれている。振り向いた先には宮仕えの魔道士が居た。

「後は頼みましたぞ」

「……分かっております」

どうやら今後のことを確認しに来ただけのようだ。用件だけ伝えと、さっさと背を向けて去って行った。

「……成程」

言い得て妙だ。

確かに彼の言葉は的を射ていた。私には素質もあるし、……誰から必要とされていないのだから。

私は代々王宮の神秘を守護するエシュリー家に生まれた。だが当主の隠し子だった私に待っていたのは、都合のいい捨て駒としての人生だった。父は私を奴隷の様に見、母は適当に殺されていた。もし魔法の素質がなければ、私みたいなのはとくに消されていただろう。殺されることもなく、かと言って必要とされることもなく、今回の様に勇者の当て馬にして人生を終わらせられる。

……それでも良かったのに、あの夜に考えが変わってしまった。

「……何処も変わらないな」

見張りとして、彼の部屋と言う名の牢獄の傍にいた時のこと。偶々持ち込んでいた本を読み終え、意識が書の世界から現実に戻って来た時に、彼の言葉が耳に入ってきたのだ。

私は偶然通りがかったふりをして、彼の部屋に入った。そこに居たのは、グランロデオを救うという振れ込みで呼ばれた男性。けれども、彼の瞳は何処までも虚ろで、何処までも色がなかった。

「まだ、起きていられたのですか？」

「……別に」

彼は椅子に腰掛け、窓の外を見つめていた。いや、実際には何も見ていないのかもしれない。ただ目を向けた先が空だったただけだろう。

「なあ、一つ聞いてもいいか？」

「……答えられる質問であれば」

そう答えると、彼は私に顔を向けてきた。呼び出されて未だ一日と少ししか経っていないというのに、彼の顔は傷つき、頭には包帯が捲かれている。

「本当は勇者なんて、誰でも良かったんじゃないのか？」

「……答えられません」

そう、答えるしかなかった。

確かに条件さえ揃えば、誰でも問題は無かった。それどころか、こちらは彼を指名した上で召喚した訳じゃない。でも、これを言っ

てしまえば、終わってしまう気がする。

「……そうか」

ただでさえ、この状況下でも泣き言一つ言わずにこちらに従っているのだ。もしかしたら、彼も私と同じように、……いや、勇者として呼ばれた時点で分かりきっていたことだ。

「帰りたい、ですか？」

思わず聞いてしまった一言、けれども彼は答えてくれなかった。最初はただの強がりかと思って、部屋を後にした。だが、彼の部屋からは怨嗟の声どころか泣き言一つ聞こえてこなかった。その時私が思ったのは、彼が私以上に、命に執着していないという考えだった。

だったら生きる理由を持たせよう。それから私は、彼に恨まれる様に暴力を振るった。王宮の人間を真似して、私にだけでも怨嗟の声を掛けさせるように。

「……何、これ？」

あの夜から三日後。私の目に映ったのは地獄だった。王宮で人が飛び交う中、次々と生まれてくる犠牲者。次々と広がる謎の病気。その病気は人間に限らず、生きとし生けるもの全てに感染していた。……けれども、犠牲になっていない人間が二人いた。

……私と彼だ。

原因は彼が王宮を闊歩するまで気づかなかったが、再び訪れた部屋では、彼は窓際に立ち、城下を眺めていた。それでも人が死ぬ様を見ることがするのに、彼は変わらず虚ろな目を向けている。……まるで、地獄ですら日常の一部であるかの様に。

今日はここまで。明日は続きをちよつと流してから、現実に戻るのでお楽しみに！

今回の調教

都合により無し

第22話

まだまだ続くよ♪

彼が呼び出されてもう一週間が経った。

ついに私と彼以外に、感染していないものは存在しなくなった。

小鳥の囀りも、訓練に励む兵の掛け声も、夜明け前から慌しく動き回る女中達の小言も、陽が昇るにつれて騒がしくなる王族や貴族達のお家自慢も、何も聞こえてこなくなった。……いや、静かになつたわけではない。病に伏し、為す術なく呻く有象無象しか存在していないのだ。

「お、おお……」

倒れたまま呻いている女中の横を通り、いつものように玉座の間へと向かっていった。一応は巫女なので、昼時には顔を出す義務があった。尤も、顔を出すだけで何をするでもないのだが。

……そこに彼はいた。地に這う王族共を見下ろし、手持ちの金品を差し出してでも助かろうとする傲慢な貴族達を見捨てて、玉座に腰かけている。

「……ああ、お前か」

玉座の間に入ってきた私を見つけて、彼はただ楽しそうに嗤い、語り始めてきた。けれども、

「見ろよ。俺をこき使ってた連中がいつも簡単にくたばっていく様を！……まあ、街にまで蔓延したのは誤算だったが、今更そんなことはどうでもいい。これからどうするかが見物だろ——」

その目は嗤っていないかった。いつも通り、空虚なまま。それでも彼は楽しそうに玉座から立ち上がる。地獄を楽しむというよりも、これではまるで……。

「何とも、思わないのですか？……これだけの地獄を見て、貴方は何とも思わないのですか！？」

「……別に」

彼はバルコニーに立ち、城下を眺めている。

「今更他人がどうなるうと、知ったこっちゃない」
違う！

私が言いたいののは、何でこんな状況下を目の当たりにしても、貴方はどうして『平然』としていられるの！？ 貴方にとって、この地獄は日常と変わらないっていうの！？

そう問いかけてくても、言葉が出ない。

彼が人間ではなく、何か別のものではないのかと考えてしまった。否、おそらく何かが巢食っている。悪魔でも呪いでもない。何か別の、おぞましいまでの何かが、彼の心に巢食って、歪ませている。

駄目だ。この人をこのままにはいけない！

一度、彼がバルコニーからこちらを振り返ってきた。その変わらない眼差しを見て、私は決意した。

……どうせ刈り取られる筈だった命だ。ならばこの人のために使おう。

この人の心に巢食う何かを、私が倒す。この人と同じ、『勇者』になって。

だから、バルコニーから戻ってきた彼の言葉に、私は従った。

「とりあえず今日からお前は俺の奴隷な。逆らったら髑髏殺す」

はいビデオ終了！お疲れ様！

「……私の旦那よりも性質が悪いね」

ミクサの話を聞き、リーンは思わずそう呟いていた。話し疲れたのか、ミクサもベッドに寝転がったまま身動き一つしなくなっていた。けれども起きているらしく、顔の運動はまだ休んではいなかったが。

「……今の話は、聞かなかったことにしてください。少なくとも、あの人には聞かれたくないのです」

「別にいいけど、あんたはまだ続けるのかい？」

「じゃなきゃ、意味がないんで、す」

起き上がろうとしたミクサを押し留め、リーンは口を開いた。
「今は休みな。もうすぐ娘が治癒魔法の得意な魔道士を連れてくる。
何をするにしたって、まずは怪我を治してからじゃないと」

「……はい」

何もできないことを悔しがってるミクサ。そんな彼女を見て、リーンは胸中で思い悩んでしまう。

（……確かに歪んでるね。相手も、この娘も）

かつて、自分の旦那は自殺しかけたところをこの世界に連れてこられた。それすらも可愛く思えるほど、二人の心は歪んでいる。

（あっちの男は、どうして歪んだんだろうねえ？）

少し時は遡る。

『……今の話は、聞かなかったことにしてください。——ザザッ』
ガシャン！！

電池の切れた携帯受信機を投げ捨て、唯はベッドに寝転んだ。

最初の町に泊まった時、ミクサの衣服に仕込んだ盗聴器を思い出して耳を傾けていたのだが、偶々彼女の話聞き入ってしまった、自己嫌悪に似た衝動に駆られていた。

「……あのクソアマ」

等と呟きながら、彼は眠りについていく。

次回もビデオ、今度は唯君の過去だよ。悪い子の皆はちゅうもく

く

今回の調教

都合により無し（かろうじて個人情報漏洩）

第23話

さあ悪い子の皆、ビデオの時間だよ。今日は唯君視点だ。そんなじゃ再生！

……物心ついたのは、自分の親を殺した時だった。

確か父親はうだつの上がらないサラリーマンで、母親のことはよく知らないが、いつも家に居ただろうことは覚えていた。

そんな父親が、一念発起して連れて来てくれたのが名も知らない『外の国』だった。けれども、そういう時に限って事件は起きた。

……ハイジャックだ。

飛行機に乗っていたのは日本人がほとんどだったが、残りの外国人は皆、巷を騒がせるテロリストだった。平和ボケした日本人に抗う術はなく、一瞬にして占拠された飛行機の行先は、アジアの一国だった。そこではまず家族等の連れが居る者と、個人で乗っていた者、航空関係者に分けられた。真っ先に殺されたのは航空関係者で、例外である若い女性は何処かへと連れて行かれた。

次に選別されたのは個人だった。若い男女は連れて行かれ、老人や肥満体の中年は全て殺された。中には逆らった者もいたが、現実ではお目にかかれない銃器であっさりと殺されていった。

最後に残ったのは、俺達を含む三組の家族連れ。

うちは俺だけだったが、他は子供がそれぞれ二人いた。身なりもしっかりしていたから、おそらくはうちよりも裕福な家庭だったんだろう。

テロリスト達は子供だけ近くに引き寄せた。途中、家族の妨害はあったものの反抗すればすぐさま腹を撃たれていた。けれどもすぐに死ぬほどではなかったと思う。実際、俺が連中から拳銃を渡された時も、まだ息をしていたのだから。

「殺されたくなければ、親を殺せ」

後に考えれば、これは酷く合理的だった。彼らが殺したのなら彼らを怨めばいいが、自分達で殺しておけば、『俺が、僕が、私が殺した』と心に刷り込ませることができる。心を壊すことができるのだ。ただでさえ、心の強い大人は極稀なのだ。子供ならよっぽどことがない限り、心を『壊されて』しまう。

他の子供達は撃てなかったという事で、連れて行かれた。おそらく売り飛ばされたんだろう。その家族も殺されている。残っているのは俺だけだった。

もう後がないと考えたのか、母親は豪胆にも、俺の手を包むように持ち、銃口を自らの胸に当てた。

「……え？」

最初は訳が分からなかった。生と死の狭間に思考が彷徨っている俺に、母はこう告げた。

「貴方は生きなさい。……私達の分も、精一杯」

その遺言を最後に、母は俺の指を動かして、

——パン！

引き金を引かせた。

乾いた音が聞こえてくるな、と考えていたら、今度は父の方が話しかけてきた。

「唯、お、俺も、ら、楽にし、てく、れ……」

押し掛かってくる母『だったもの』を押しつけ、俺は父親に銃を向けた。今度は、自分一人の力で銃を構え、引き金を引けると思えた。……確信してしまった。

「じゃ、あ、な。おれ、は、あきらめ、たけ、ど、ゆ、唯は。あきら、める、な、よ」

最後に笑う父の歪んだ笑顔を見て、俺は物心がついた。

——パン！

『歪んだ』自我が生まれた。

以来、俺は墮落したまま生きてきた。

テロリストの言うままに戦闘訓練を受け、仲間の少年兵の言うままに脱走を企て、拾った傭兵の言うままに人を殺してきた。最後には戦場近くにいたNGO団体に引き取られて日本に戻り、高校・大学を卒業して細菌学者になった。細菌学者になったのだって、偶々見た映画の登場人物を目の当たりにして、一番『死に近い』と実感したからだ。

『生きなさい』

『諦めるな』

命を賭して守ってくれた両親の遺言が、自分をここまで生き残らせていた。自殺も企てたことがあるが、頭の中に二人の言葉がリフレインするだけで実行には移さなかった。だから一番死に近い、この仕事で全てを終わらせようとした。

けれども、

「ようこそ勇者様。グランロデオ王国へ」

目の前にいた女、ミクサに連れられるまま勇者となった。だがグランロデオ王国も、俺が滅ぼした。

……でも、それなら何故、俺は生きている？ 何故抗ウイルス薬ワクチンなんて用意していた？

本当は生きたかったんじゃないのか、と今でも考えてしまう。

例えばどんな過去を歩もうとも、今を生き、未来へと進みたいと考えてしまっているんじゃないのか、そう考えていたから、無意識に抗ウイルス薬を自分に投与してしまったのかもしれない。予備の分をミクサに投与したのはほんの気まぐれと、全滅した時の保険に過ぎない。

けれども彼女は、何故か俺についてくる。あまつさえ、

『この人の心に巣食う何かを、私が倒す』

等とほざいて。倒せるわけがない。こいつは蠱毒だ。

失意、絶望、墮落、腐敗、ありとあらゆる負の感情を食らい合わせ、その結果生まれたのが俺の心だ。それを倒すことなど……不可能だ。

今回の調教
都合により無し

第24話

ビュデオは続くよ、どこまでも♪

そして蠱毒について説明しよう。

蠱毒とは、器の中に多数の虫を入れて、互いを殺させ合うんだ。そして最後に生き残った虫を使って呪いをかける技法なんだ。生き残った虫は最後まで生き残る力を持った存在で、それ自体がありとあらゆる負の塊で、呪いの源なんだよ。だから唯君の心は、人間の負の感情を虫に例えて、最後に生き残った感情に支配されているんだ。怖いね。

それじゃあビデオの続き（といっても数行で終わっちゃうけど）、スタート！

……そうだ、俺の心は蠱毒のなれの果てだ。それを倒すということは、俺自身を否定することだ。できるわけがない。そんなこと、できるわけが……。

「……ん、んん」

薄闇が差し込んだ部屋の中、唯は目を覚ました。未だ霞む目を擦り、彼は静かに上半身を起こす。既に陽は落ち、辺りが夜闇に包まれているために光が差し込むことはない。

そんな中、周囲を見渡す唯の視界に、見慣れぬものが映っていた。

「何だ……？」

ベッドから起き上がると、唯はテーブルの上に載っているものを一つ、手に取った。徐々に闇に慣れてくる目に映ったのは、……歪な形のおにぎりだった。

少し前。

——ボタン！

「すっかり治ったね」

「はい、わざわざありがとうございます」

先程までいた魔道士を見送り、リーンは怪我がすっかり引いたミクサに振り返った。けれども起き上がるうとするにはまだ早いと、足早に近づいてベッドに無理矢理押し戻した。

「……まだ行く気かい？」

「じゃないと、意味がないんです。それに『出てけ』とは言われても、『帰ってくるな』とは言われていません」

強情なミクサにリーンは呆れてしまうも、ふと名案が浮かんだのか、押さえつけたまま一つの提案を告げた。

「だったら、その状態でもできることにしとかない？」

「できること、ですか？」

ミクサは代替案を不思議に思うも、興味があるのか無理に起き上がることはしなくなった。それにリーンは畳みかけるように口を開いた。

「もうすぐ夕飯時だ。それにうちの旦那も『勇者』だって言うただろ。……だったら作ってみないかい？」

彼の故郷の料理をさ。

——ギイイイ……

僅かな金切音を上げる扉を開けると、そのすぐ近くで壁にもたれているミクサが居た。彼女は膝を抱えたまま頭を埋めてじっとしている。規則正しく身体が揺れているので、おそらく寝入っているのだろう。けれども髪の間隙から、先程外していた筈の首輪が戻っていることに気づいてしまった。

「……………」

唯は黙ったままミクサを見下ろし、次に手に持っていた紙切れを見つめた。この紙はテーブルの上に置かれたおにぎりの傍に置いてあり、この世界の言語で小さく、丁寧な字が書き込まれていた。

『ご主人様の故郷の料理です。少しでも、貴方の心が楽になります

ようじ」

手紙とミクサを交互に見る唯。彼は何も言わないまま、手紙を握り潰した。そして彼女に手を伸ばし……。

——ドン、ドン！

「……何さいったい？」

既に食堂も閉め、今から寝る支度に取り掛かろうとした時に、突然の来訪者が訪ねてきたようだった。リーンは未だ着替えていないので、そのまま扉を開け、……呆れ返ってしまった。

「何か用かい？」

「……水をくれ」

その来訪者はおにぎりの載せられた皿を左手に持ち、右手のピッチャーを差し出してきた。

「一つ食ったが不味過ぎてな。……水でもない全部食べそうにな
い」

「……ちよつと待つてな」

なら食うなとも思ったが、無粋だと感じたリーンは台所に足を開けた。

「水より茶の方がいいだろう？」

背中越しに言葉を残し、リーンの頭に浮かんだのは、慣れない手つきで一生懸命にベッドの上で米の塊を握っているミクサと、不味そうにしながらも全部食おうとする唯の無表情な顔だった。

(……どっちも不器用なこと)

リーンは薬缶に水を入れ、竈に火をくべた。

今回の調教

都合により無し

第25話

——明朝

「……とつと起きろ馬鹿」

「ごっ！！」

「げふっ！？」

突然の痛みにミクサの意識は強制的に覚醒させられ、腹部からくる痛みに若干涙目になってしまった。

「あうっ……」

「起きたらとつと着替えろ。明日には町を発つんだから、今日中に買い出しに行かないと……」

そう言つて背を向ける唯に、ミクサは寝ぼけて思考が働かない頭を強制的に動かした。

確か昨日は、自分が彼の心に入ろうとして返り討ちに合い、そして部屋に戻ってきたのはいいものの、寝ていたので外で待っていてそのまま寝入つて……。

「……あ」

そういえば、昨日おにぎりと手紙を残して唯の寝ている部屋から辞したのだと思いだし、そして今、自分が何処に居るのかを漸く理解した。

（ここ、私がこの部屋で寝ていた場所だ。それに……）

今は近くに飛んでいるが、傍には毛布がある。いつもは何もかけずに寝ているのに、これは一体——っ！？

「は・や・く・し・ろ。……俺が戻るまでに終わらせとけよな」

そう言つてミクサの頭に拳骨を与えてから、唯は部屋を出ていった。おそらく廁だろう。この時間帯はいつも用足しに行っているの、いちいち詮索する必要もなかった。

「あたた……」

頭を擦りつつ、ミクサは立ち上がってテーブルに目を向けた。そ

の上に載っていたのは、空の皿と中身のない湯呑、それから何やら黒い物体なのだが、その小さくて丸い物体に関する知識は、ミクサの頭には存在していなかった。

——ボタン！

「おや、起きたのかい」

「……あ、昨日はお世話になりました」

入ってきたのは唯ではなく、掃除用具を手に持ったリーンだった。

「あの、状況が読めないのですが——」

「ああ、多分聞かれてたんだよ。あんたの話」

へ？ と不思議そうに顔を呆けさせたミクサに、リーンは口を開いて説明しだした。

「昨日言っただろ、ここと私達の部屋は床一枚隔てているだけだから、話し声が聞こえるって。……じゃなきゃ、あの手紙だけでどうこう変わる筈ないんだよ」

そういえば、昨日おにぎりと一緒に手紙を置いた気がする。内容は短かったので覚えてはいるが、あまり大したことは書いていなかった。それなのにまるで……。

「……結局、変わらなかったんでしょうか」

「さあね。……ただ、いきなり全部変えていくと、その変化についていけなくなるもんだよ」

だから徐々に、ゆっくりとね。

そう言い残して、リーンは部屋を出ていった。それにつられて、ミクサも慌てて服を着替えた。怪我は全快したものの、衣服に關しては昨日ぼろぼろにされたので、結構酷い有様だった。

荷物から予備の服を取り出し、素早く脱いでからそれらを身に付けていく。終わると同時に、もう終わったのか唯が扉を開けて頭だけ入れてきた。

「終わったか？」

「は、はいご主人様！」

まだ髪が乱れていたが、この程度ならすぐに梳き終ると手櫛で梳

き始めたミクサを見て、唯は軽く息を吐いて部屋に入ってきた。

「慌てる必要はない。……ああ、そうだ」

何かを思い出したかのように、唯は右手をミクサに伸ばしてきた。また昨日みたいに痛めつけられるのかと、若干怯えたミクサは思わず目を閉じてしまうが、

——バチン！

「あうっ！？」

受けたのはデコピンだった。弾いた指を握って右手を引き、その手は唯の腰に当てられた。

「次不味い飯よこしたらただじゃおかないぞ。ミクサ」

「つつ……」

先に食堂に行っている、と唯は部屋を後にしていた。

デコの痛みに悶えながらも、何とか髪を梳き終えたミクサは、思いついたかのように扉の方に顔を向けた。凄い勢いで。

「今、私の名前……」

今まで名前で呼ばれてこなかったのに、突然起きた小さな変化に、ミクサの口元は無意識に綻んでいた。

「……ちよつと待ってください。唯様！」

髪も結び終え、ミクサは部屋を出て、唯の背中を追いかけていった。

変化は小さく、けれども徐々に広がっていく。突然環境が変わっても、全ての生物は何もかもをいきなり変えることはできない。できるのは精々、徐々に変えていくことくらいなのだ。

今回の調教

蹴り起こす1回

拳骨1回

デコピン1回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3731y/>

勇者と奴隷の珍道中

2011年12月3日18時04分発行